

法政大学

EToS

2024 vol.8

8

江戸東京研究センター

Hosei University Research Center for

Edo-Tokyo Studies



表紙図版の出典（上から）：

- 「天保江戸大地図（1843年）」国立国会図書館
- 「国土地理院航空写真（2017年）」国土地理院
- （一財）日本地図センター刊行「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京測量原図」のうち「新宿区市ヶ谷付近」を使用
- 「ソリッド・ボイド・マップ（2018年）」法政大学北山研究室製作

法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
<https://edotokyo.hosei.ac.jp>
問い合わせ先：法政大学 江戸東京研究センター事務室
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp TEL 03-3264-9682

発行：2024 年 3 月 31 日

目次

マニフェスト	2
--------	---

都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価	3
江戸東京研究センター長、法政大学文学部教授 米家志乃布	

研究プロジェクト活動報告

① 地理情報システムと名所の景観	4
② 都市表象史	6
③ 表象文化と近未来デザイン	8
④ 外濠市民塾	10
⑤ 江戸東京の島プロジェクト	12
⑥ 「Tokyo Time Travel」東京街歩きツアー事業	14

2024年度事業報告

シンポジウム・研究会

講演会「16世紀の驚き：日本にとっての西洋との初めての出会い」	16
シンポジウム「水都江戸東京シンポジウム『水都東京の近未来を考える』～テリトリーオの視点から～」	20
シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」	24
シンポジウム「海からみる江戸東京－東京湾の歴史・現在・未来」	26
江戸東京研究センター2024年度報告会	28

学内外・地域活動

講義「フィールドワーク」	29
講義「都市解読方法特論－東京発掘プロジェクト 水辺編」	29
講義「人文地理学セミナーA」「人文地理学セミナーB」	30
EToS監修・協力講座「【1年で学ぶ教養】新・江戸東京研究」(NHK文化センター青山教室)	31

著書・論文・その他	32
-----------	----

メンバー	40
------	----

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の
自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・
空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を
構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題
を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature,
history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live
on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally
and spatially, and derives from them a method and theory for constructing
sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is
nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of
global communities.

江戸東京研究センター長、法政大学文学部地理学科教授

米家志乃布

本センターは、2017年度に文部科学省・私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」に採択されたことにより設置されました。当初の研究期間である5年を経過し、現在まで大学より延長が認められてきました。新しい段階として、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を継続して調査・研究し、単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先を考える視点を見出すことを目標としています。とりわけ、法政大学が総合大学であることの利点を生かし、理系と文系が協働して研究を進める当センターの特徴と意義をより前面に押し出すような枠組みを新たに設定いたしました。

具体的には、従来の5つのプロジェクトを「地理情報システムと名所の景観」「江戸東京の文学と都市史（2024年度より都市表象史）」、「表象文化と近未来デザイン」の3つのプロジェクトに再編いたしました。市ヶ谷校地に理系のデザイン工学部が存在していることを活かして、個々のプロジェクトに当該学部からリーダーを選出し、文系のリーダーとの共同関係をスムーズに築けるようにしたうえで、2022年度の途中から徐々に新たな体制に移行しながら、それぞれに研究活動を行ってまいりました。

そのなかで、2024年度の最大の成果は、本センターの研究プロジェクトが三菱財団の人文科学大型連携研究助成（研究代表者：米家志乃布）に採択されたことです。申請テーマは

「都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価－江戸東京研究を事例として」です。研究計画では、本センターの主要な3つのプロジェクト（①地理情報システムと名所の景観、②都市表象史、③表象文化と近未来デザイン）の研究活動を中心に、研究会やシンポジウム企画を重ね、研究成果を公表し、研究終了の2027年度までにEToS叢書の続編の刊行および全体成果としての江戸東京の地図作成・刊行を目指していきます。

さらに2024年度からは公益財団法人・東京観光財団と協定を結び、東京を訪れる外国人観光客向けの「Tokyo Time Travel」街歩きツアー事業を展開いたしました。旅行者に広く東京のストーリーを伝えること、ウォーカブルシティ東京の魅力を知ってもらうことを目的としております。これまでの江戸東京研究センターの研究員による多くの研究成果を、直接に社会還元する事業として位置付けられるでしょう。また2023年度から始まったNHK文化センター青山教室の「新・江戸東京研究」講座には、今年度も12名の講師を派遣いたしました。

引き続き、「文理複眼」を枠組みとした江戸東京研究センターの特色を生かした研究活動を推進し、当センターの学術的な存在意義を社会にアピールしていきたいと考えます。どうかよろしくお願い申し上げます。



米家志乃布

法政大学文学部教授。
1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報－日本北方地図史再考』（法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験－江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）など。

1

Project 1
地理情報システムと名所の景観

法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授、プロジェクトリーダー 福井恒明
法政大学文学部地理学科教授、プロジェクトリーダー 米家志乃布

本プロジェクトは、地理情報システム（GIS）を用い、江戸東京の様々な名所を2次元・3次元に表現する方法を探究し、それを具体的なかたちで公開することを目標としている。2024年度は、『江戸名所図会』の挿絵の描画領域をGIS上に展開し、そこから江戸の景観構造分析を試みた。また、昨年度までに実施してきた史跡や名所に関する地理分布研究のデータ整備を継続すると共に、江戸東京の史跡に関するシンポジウムを開催した。

（1）江戸名所図会挿絵の描画領域と江戸の景観構造
『江戸名所図会』や『名所江戸百景』など、名所を描いた挿し絵や浮世絵などの位置を特定し、「どこを描いたか」を知ろうとする研究や書籍は数多く、現代の散歩案内としても人気が高い。また、それらの構図の特徴に着目した研究も多い。本研究では、広く流布した名所絵が全体として江戸の景観構造を認識させるメディアとして機能したと位置づけている。それぞれの名所絵の描画範囲を地図上に推定し、全体の特徴や分布を見ることで、江戸東京の景観構造の特徴を明らかにすることを目指している。
今年度は、『江戸名所図会』（1834-36年出版、斎藤月岑

編、長谷川雪旦画）の挿絵のうち、具体的な風景が描かれた656枚を対象に、古地図等を用い、画面内の事物を特定して描画範囲の推定を行った。名所の位置が推定できたのは546枚、描画領域の推定が可能だったのは336枚であった（図1）。描画領域の推定ができなかったものには近景でまちなみや人の活動を描いたものなどがある。
構図については、鳥瞰的な視点から名所を含む広い領域を描き、地形や地域内の事物の位置関係がわかるものと、地面に立つ人の視点から比較的狭い範囲を描き、まちなみや人の活動を描いたものに分けられる。それらの分布を地図上に表現したところ、前者の分布は江戸の郊外だけではなく中心部にも見られ、隅田川沿い（浅草や河口部）などが特徴的であった。これらによって大きな江戸の地形イメージの骨格が読者に伝えられたと捉えられる。後者の分布は江戸中心部でも偏在し、深川や品川宿といった郊外の一部にも見られた。江戸名所図会の挿し絵には、こうした遠景的表現と近景的表現の二重性があり、その分布の違いに特徴があることが明らかになった。
今後はその内容をわかりやすい地図表現とする作業を行う。

（2）史跡研究データの整備
明治から戦後にかけての東京の史跡や名所案内について、紹介対象の位置を地図上にプロットし、分布の経過を見るためのデータ整備を行っている。
今年度は、『東京史蹟寫眞帖』『東京府史蹟』『東京の史蹟』『東京都史蹟名勝天然紀念物旧市域内』について、地図分析のデータ化を進めている。また、『大東京写真案内』（1933）や『東京案内』（1950）などの案内本や名所絵の地理分布についても地図化と分析の準備を進めている。

（3）シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」の開催
史跡に関する研究についての中間とりまとめとして、シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」を開催した（2024年10月19日）。清水英範氏による基調講演「ベックマンの東京計画―国会議事堂はなぜ、あの永田町の丘に建っているのか―」に加え、一連の研究報告「東京の史跡／史蹟と地域性（米家志乃布氏）」、「河井弥八と文化財保護行政（内藤一成氏）」、「井下清と東京市公園行政の史蹟保存施策（齋藤智史氏）」、「江戸城外濠の利活用（高道昌志氏）」、「江戸史蹟の保存とその課題―浜離宮恩賜庭園を素材として―（根

崎光男氏）」が行われ、森田喬氏のコメントで締めくくられた。
明治初期の官庁集中計画、大正から昭和初期にかけての東京市の取り組み、戦後の皇居の史跡指定、大正から現代に到る江戸城外濠の変遷、江戸から現在まで大きく位置づけが変わってきた浜離宮が題材となった。全体を俯瞰する地図上での把握が補助線となり、明治以降の東京の破壊と建設に沿った幅広いタイムスパンでの議論が行われた。史跡の性質や位置づけが変わる中で、実施された政策や立案された計画が、東京の都市空間に少なくない影響を与えてきたことが明らかとなった。また、史跡の保存方針をどのように考えるか、地域資源としてどのように史跡を活用するか、が史跡をとりまく課題として指摘され、史跡の未来に向けた議論につながった。

本プロジェクトはデザイン工学部、大学院デザイン工学研究科、文学部および大学院人文科学研究科の学部生・大学院生が作業の中心的役割を果たしている。協力してくれた学生諸君に感謝の意を表す。

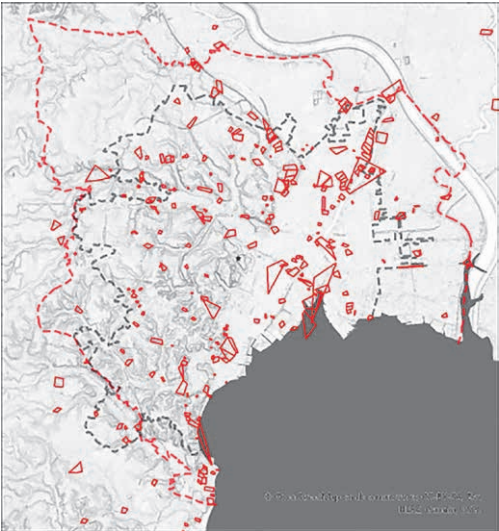


図1 江戸名所図会の挿絵に描かれた領域



福井恒明（ふくい つねあき）

法政大学デザイン工学部教授

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『土木デザイン』、『景観用語事典』等。千代田区景観アドバイザー、最上川左沢・四万十・葛飾柴又・佐渡の文化的景観に関わる。



米家志乃布（こめいえしのぶ）

法政大学文学部教授。

1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報―日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験―江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）。

2

Project 2
都市表象史

法政大学文学部日本文学科教授、プロジェクトリーダー 小林ふみ子
法政大学デザイン工学部建築学科教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦

「都市表象史」プロジェクトは、当センターの研究の歴史的部分を担当しています。先史時代以来の歴史のなかでもとりわけ近世・近代の人文的な文化の基層を明らかにし、その上で地域のコンテキストや仕組みがいかに形成されてきたのかを、文字テキストや図像によって表象された名所空間などを文理双方の視点から複眼的分析することによってその特質を探ることをめざすものです。2024年度には、研究対象が歴史的な文字テキストだけでなく視覚表象にも広がってきたことを承けて「文学と都市史」から「都市表象史」と改称しました。

昨年度末に本プロジェクトの主唱により第1回のシンポジウムを実施した東京湾シンポジウムの延長線上で、センター全体の企画としてシンポジウム「海からみる江戸東京～東京湾の歴史、現在、未来」が行われ、陣内秀信による趣旨説明、田中優子による基調講演「松平定信にとっての海」のほか、本プロジェクトからも以下のように参画しました。登壇順に挙げれば、近世の地誌から現代に至るまで継承されている佃島・石川島をめぐる伝承を検証した小林ふみ子「江戸前の島をめぐる説話」、落語の舞台として描かれた江戸前の海から東京湾に対する大衆的認識を探る中丸宣明「落語における江

戸前」、近世から昭和の高度成長期に至るまで少なからぬ人口が舟を生活の場としてコミュニティを形成していたことを報告した高村雅彦「東京湾を移動する船上生活者」の3報告です。

とはいえ、高村の多忙および小林のサバティカル取得により、これ以外にほとんど研究を進展させられなかったことは大きな反省点です。

ほとんど唯一の企画が、来る3月22日(土)に予定している「江戸空間のなかの蔦屋重三郎」となります。18世紀後半に江戸において出版文化が花開くなかで、今日、文学史・美術史のうえでも重視される作品の数々を生みだした版元蔦屋重三郎は、本年のNHK大河ドラマでも注目されているところです。その蔦屋重三郎の編集力を分析した田中優子『蔦屋重三郎 江戸を編集した男』(文春新書、2024年10月刊行)について、その企図と内容を著者が紹介するとともに、江戸という都市空間のなかにおいて蔦屋重三郎をとりまく環境がどのようなものであったのかを考えたいと思っています。具体的には、蔦屋重三郎が当初、活動した地本の世界、つまり江戸当地での流通・消費を想定した書籍、絵草紙、浮世絵の版元たちである地本問屋仲間、およびその後に加した三

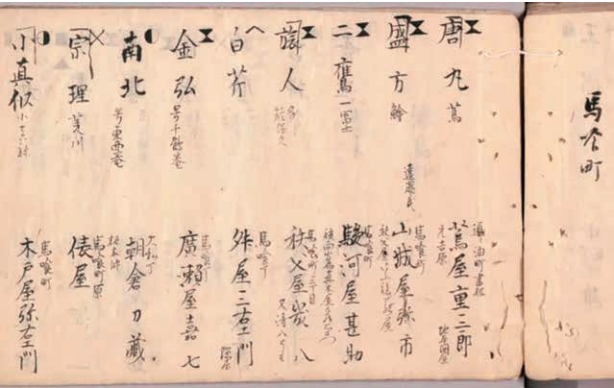
都で流通させた書物の版元たちである書物問屋のうち、とくに蔦屋に関連する本屋たちとの位置関係を地理空間的に把握したうえで、蔦屋の視点で当時の出版界を見てみようということです。あわせて蔦屋が出版物をプロデュースするうえで欠かせないプレイヤーであった戯作者・狂歌師・浮世絵師らの居所の分布や蔦屋との位置関係について検討します。出版のための版木を製作する彫師、紙に文字や絵を摺りつける摺師、製本時の表紙屋などについては資料がなく、探りきれないのは残念ですが、蔦屋の出版活動を地理的に考える、これまでになかった試みとなることを期しています。



浅草市人撰『狂歌東遊』より蔦屋重三郎店頭図(北斎画) 寛政11[1799]年刊
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533319> (参照 2025-02-28)

また3月4日(火)に、小林の科学研究費補助金(基盤研究(C))で実施する国際シンポジウム「摺物にみる江戸狂歌人の知識と教養」も江戸東京研究センターの後援事業で、江戸を拠点とする狂歌人たちのグループが製作した狂歌摺物や狂歌本の基底にある知識や教養のあり方を、小林を含む8名の発表者が探ります。そうした知識体系のなかに江戸という都市に対する認識も含まれ、江戸東京研究につながるものと考えております。

今年度の活動停滞の反省をふまえつつ、次年度は江戸東京を大きく特徴づける文化遺産としての大名庭園をとりあげる研究活動を構想しているところです。



江戸文化の世界の地域別人名録、瀬川富三郎編『諸家人名江戸方角分』(文政元・1818年大田南畝写) 国立国会図書館蔵本
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2542002/1/77>



小林ふみ子 (こばやし ふみこ)

1973年山梨県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。2004年法政大学着任、2014年より文学部教授。専門は日本近世文学・文化。2004年第29回日本古典文学会賞、2024年第17回国際浮世絵学会賞を受賞。主著に『天明狂歌研究』(汲古書院、2009年)、『大田南畝江戸に狂歌の花咲かす』(岩波書店、2014年、2024年角川ソフィア文庫として再刊)、『へんちくりん江戸挿絵本』(集英社インターナショナル、2019年)などがある。



高村雅彦 (たかむら まさひこ)

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同济大学客員教授。主な編著書に『水都学Ⅰ～Ⅴ』(法政大学出版局、2013年～2016年)、『タイの水辺都市 一天使の都を中心にー』(法政大学出版局、2011年)、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』(山川出版社、2000年)などがある。

3

Project 3
表象文化と近未来デザイン

現代の東京を歩く実践知のレッスン

法政大学国際文化学部教授、プロジェクトリーダー 岡村民夫
法政大学デザイン工学部建築学科准教授、プロジェクトリーダー 山道拓人

「表象文化と近未来デザイン」プロジェクトは、東京をめぐるアクチュアルな表象文化と都市デザインを研究している。三菱文化財団により江戸東京研究センターのテーマ「都市のアイデンティティの再発見と近未来にむけての再評価・江戸東京研究を事例として」に対する研究助成が採択された結果、本プロジェクトとしてこれにどのようなかたちで参加するのかを岡村民夫・山道拓人プロジェクト・リーダー間で議論し、つめていった。かくして、すでに進めていた、東京を表象する映画・アニメ・漫画・文学の研究と、下北沢・成城を中心とした東京西郊の研究の二本立てで行くという大枠を決めた。前者に関しては、一般書籍化する方向で出版社編集者との交渉を進め、また執筆陣の素案を立てた。後者に関しては、アウトプットの方法を検討中である。

今後の方向性の議論に時間を費やさざるをえなかったことや、プロジェクトリーダーの多忙により、2024年内にはイベントを開くことができなかったが、2025年2月4日に本プロジェクト関係者のみで世田谷区成城のフィールドワークを行った。これは、2024年1月26日に催した研究会「下北沢から考える 下北沢の街歩き＋クロストーク」を延長した調

査であり、東京西郊についてのメンバーの共通理解が深まり、今後の本プロジェクトチームにとって非常に有意義な活動となった。当日、成城学園の位置を確認後、丹下健三邸跡、柳田国男邸跡、猪俣邸、旧山田家住宅などを見学した。

丹下邸は1953年に建てられた丹下健三による自邸。丹下健三が設計した数少ない住宅作品であり、柱によって持ち上げられた2階の生活空間下のピロティが特徴的である。跡地には、この建築をリスペクトしたような1階部分に窪みのみられる2階建ての建築が建っていることが確認できた。柳田国男は1927年、みずから基本設計したハーフティンバーの洋館（飯田市博物館の敷地に移築・公開されている）に移り住んだ。成城のまちづくりに参加する一方、ここを拠点に武蔵野・多摩・相模のフィールドワークを定期的に行った。猪俣邸は、吉田五十八による1967年の近代数寄屋の名建築。現在、一般財団法人世田谷トラストまちづくりによってよく管理されており、公開されて自由に見学できる。成城四丁目の急坂を下って喜多見不動産を訪ね、国分寺崖線の景観を体感し、湧水や横穴古墳を核とした地域の信仰への理解を深めた。



岡村民夫（おかむら たみお）

1961年横浜生まれ。立教大学大学院文学研究科単位取得満期退学。法政大学国際文化学部教授。表象文化論、場所論。著書に『旅するニーチェ リゾートの哲学』（白水社、2004年）、『イーハトーブ温泉学』（みすず書房、2008年）、『柳田国男のスイス ― 渡欧体験と一国民俗学』（森話社、2013年）、『立原道造 ― 故郷を建てる詩人』（水声社、2018年）、『宮沢賢治論 心象の大地へ』（七月社、2020年）など。宮沢賢治学会イーハトーブセンター代表理事、四季派学会理事、表象文化論学会会員、日本エスプレント協会会員。



柳田国男邸跡

旧山田家住宅は、アメリカで事業を成功させた実業家植崎氏によって建てられたアメリカ風住宅の影響を受けた住宅。終戦後には一時進駐軍（GHQ）に接收されていたといい、1960年には住宅を売却し、翌年に画家で南画院（現特定非営利活動法人南画院）の代表山田盛隆氏が購入した。洋風の外観や個室の集合でできていることやランドリーシュートを持つことなど当時の成城の生活像を把握する上で貴重な資料となる。こういった建物群と国分寺崖線などの地形の位置関係を確認した。他にもさまざまなレイヤーを含め2025年度は展開していこうと考えている。本年度の一般公開イベントとしてはシンポジウム「東京を散歩哲学する」を3月1日に開催する予定である。島田雅彦氏（小説家・評論家、法政大学国際文化学部教授）に、近著『散歩哲学のすすめ よく歩き、よく考える』（ハヤカワ新書、2024年）に関連した実践的・経験的な散歩哲学を講演していただき、伊東弘樹氏（早稲田大学教育学研究科後期課程、近代日本文学研究）が、国木田独歩の渋谷・武蔵野の表象について、岡村が、柳田国男と萩原朔太郎の東京西郊への移住と散歩について発表をする。散歩を、書き方・生き方・社会に対する批評的なまなざしに直結した創造的行為として再評価することを試みる（その報告はこの報告書にまにあわないので、次年度の報告書で行いたい）。



山道拓人（さんどう たくと）

1986年東京都生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。ツバメアーキテツ代表取締役、法政大学デザイン工学部准教授。代表作に「下北線路街BONUS TRACK」「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」「天窓の町家一奈良井宿 重要伝統的建造物の改修―」「NHK Media Design Studio」「パナソニックのデザインスタジオ FUTURE LIFE FACTORY」など。



旧山田家住宅

最後にプロジェクト・リーダーの関連研究について述べる。公開研究会「東京の新名所『史蹟と銭湯』」（2020年10月）のコメンテーターを務めた際、岡村は、夏目漱石『吾輩は猫である』の銭湯表象が『草枕』『明暗』などの温泉表象と共通して画期的と思われるという意見や、銭湯と温泉のあいだには相互影響関係があるはずだという意見を述べたが、それらを単著『温泉文学史序説』（水声社、2024年）で展開した（「序章 浴する文学」、「コラム① 銭湯と温泉のあいだで」）。また岡村は、1980年代以降、数人の外国人映画監督（クリス・マルケル、ヴィム・ヴェンダース、ジャン＝ピエール・リモザン、ソフィア・コッポラ、ホウ・シャオシェン、アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ……）が表面的なジャポニズムの罫を回避しながら日本人監督以上に積極的かつリアルに東京を描いているということを数年前から研究しており、その成果の一部を、江戸東京研究センター監修・協力講座「新・江戸東京研究」の第9回「外国人監督による東京の表象 『東京画』から『PERFECT DAYS』まで」（NHK文化センター青山教室、2024年12月13日）で講義した。山道は、3年間ほど継続している町家に関するガイドブックの出版作業を今年度はしてきた。現在、編集作業をしており、資料を追加するなど、作業の最終段階に差し掛かっている。2025年度初頭には発行できるものと思われる。

4

Project 4
外濠市民塾

法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授、プロジェクトリーダー 福井恒明

1. 2024年度の活動概要

本年度で13年目となった外濠市民塾は、コロナ禍で中断していた一般向け対面イベントを5年ぶりに再開した。また、課題となっていた学生メンバーの外濠に関する知識やイベント実施のノウハウ、関連団体との関係強化について取り組んだ。

2024年度には9回の運営委員会を開催した。運営委員会は対面とオンラインの併用により実施し、活動の準備や進捗報告、関連する外部イベント等の情報共有、意見交換等を行っている。学生は3つのグループに分かれ、まちあるきチーム、Web運営チーム、水上利用チームとして活動した。

具体的な活動として、5年ぶりに対面一般公開にて第15回外濠市民塾を開催した。また学生が中心となった企画として2回の外濠まちあるきを実施した。外部と連携した企画として玉川上水・分水網上下流都民連携シンポジウムへの登壇（高道昌志氏）、外濠水辺再生協議会との意見交換を行った。また、関連する活動として外濠水上コンサート「奏」を支援した。



福井恒明（ふくい つねあき）

法政大学デザイン工学部教授

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『土木デザイン』、『景観用語事典』等。千代田区景観アドバイザー、最上川左沢・四万十・葛飾柴又・佐渡の文化的景観に関わる。

2. 第15回外濠市民塾の開催

第15回外濠市民塾は2024年6月1日にDNPプラザで開催された。「路上で発見!!わたしたちでつくる外濠新名所」と題し、路上観察家の林丈二氏を講師に招いた（図1）。会場でのセミナーには47名、まちあるきを含むワークショップには38名が参加した。参加者には継続して活動連携している三輪田学園高等学校の生徒を含んでいる。

林氏のセミナーでは、街に出て小さな気づきを読み取るエッセンスや、林氏が事前の路上観察の成果の一部が紹介された。その後6-7名ずつ6班に分かれ、飯田橋から市ヶ谷の外濠周辺を分担してまちあるきを行い、「外濠新名所36景」の候補写真を撮影した。会場でのワークショップを経て36枚の写真を選定し、林氏に講評していただいた。その後、外濠新名所36景については公表を前提に、私有地の事例入れ替えや写真の再撮影などを行う作業を実施した。

3. 学生主体のまちあるき

2023年度に引き続き学生主体で外濠周辺のまちあるきを行い、外濠とその周辺の状況を観察し、事後に意見交換を行って知識の共有を図った。



図1 第15回外濠市民塾の実施状況

第1回まちあるきは2024年9月29日に実施し、12名が参加した。対象地域は虎ノ門から東京駅にかけての（旧）外濠の南東側である。埋め立てられた地域で外濠の痕跡を探す作業を行った。終了後、法政大学市ヶ谷田町校舎に集合して振り返りを行った。

第2回まちあるきは2024年12月14日に実施し、13名が参加した（図2）。対象地域は前回の継続として東京駅から日本橋川沿いに水道橋付近までを歩いた。日本橋川沿いでは左右岸を2班に分かれて探索した。終了後は前回同様に法政大学市ヶ谷田町校舎で振り返り作業を行った。

4. 外部の活動・団体との連携

外濠市民塾および外濠再生懇談会では、玉川上水・分水網上下流で活動している団体との連携を継続的に行っている。今年度は第7回玉川上水・分水網上下流都民連携シンポジウム（2024年11月17日）に高道昌志氏が話題提供者として登壇し、外濠市民塾の活動を紹介するとともに、「外濠四季絵巻2036」の展示を行った。

外濠周辺に立地する企業が中心となって活動している外濠水辺再生協議会とは、これまでも活動への相互参加などを行ってきた。2036年に向けて外濠再生に向けた具体的な機運を高めるための意見交換会を実施した（2024年11月12日）。この時点では外濠再生に関する活動を行っている団体が協働する体制作りで合意した。しかしその後外濠水辺



図2 学生まちあるきの状況

再生協議会が解散する見通しとなった。今後は外濠水辺再生協議会の構成員の方々の個人的協力を得つつ、千代田区などの行政とも連携して外濠再生の具体的な方策を検討する方針である。

5. 外濠水上利用

第14回水上コンサート「奏」は2024年9月12日に開催された。この運営は学生を主体とする奏実行委員会が担っており、そのメンバーの多くは外濠市民塾に参加する学生と重なっている。外濠市民塾は「奏」の趣旨に賛同し、必要な助言や広報などの支援を行った。昨年度に培ったノウハウを活かし、今年度は運営がより効率化された。99名の来場者は昨年より6名増加した。ただし年々会場使用の制約（スペース及び使用料）が増しており、採算に苦しむ場面が見られるため、活動方針を検討する時期に来ているとの印象もある。

6. 2025年度の活動計画

2024年度は、対面イベントの再開により外濠市民塾のプラットフォーム機能を再構築に着手できた一方で、その後の活動目標をより具体化する検討の必要性が明らかとなった。2025年度は「外濠vision2036」の改訂など、外濠開削400周年に向けた具体的な目標設定とそのための活動企画を行うとともに、定期的な対外イベントの実施と情報発信で外濠市民塾の存在感を高める活動を行っていく。

5

Project 5
江戸東京の島プロジェクト

東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教 高道昌志

本研究プロジェクトは、2023年度に開催したシンポジウム「島からみる江戸東京～交流・広がり・領域」をきっかけとして結成されたものである。従来、江戸東京研究の枠組みにおいて、あまり関心が向けられてこなかった東京島嶼部に光をあて、江戸東京とのつながりや断絶、あるいは関係性や領域性という観点から島嶼を分析し、また同時に江戸東京の独自性や固有性を島嶼という外側の視点から捉えなおすことを目的としている。上記シンポジウムをはじめプロジェクト内での研究交流を通じて、都市東京と伊豆諸島との人やモノ、文化や情報交流に関する影響関係の輪郭が徐々に浮かび上がりつつあるが、こうした成果をもとに、2024年度は担当研究員がそれぞれ個別に調査研究を重ねてきた。その成果の一部を本稿にて紹介したい。

まず、以下に今年度の本プロジェクトに関する成果を列記する。

- ・高道昌志「伊豆大島波浮港の集落構造に関する研究」『日本建築学会2024年度大会（関東）学術講演会』東京、講演番号9287、2024年8月
- ・金谷匡高、邵帥、余鵬正他（新島抗火石町並み研究会）

- 「新島村における集落構造の解明とコーガ石建造物群の歴史的再評価－近代期の資料調査及び実測調査を通して」『住総研 研究論文集・実践研究報告集』No.51、2025年3月
- ・内藤啓太、高道昌志、張平星「天水井戸を用いた伝統的水利システムによる庭園空間に関する調査－大島町波浮港旧甚の丸邸庭園を対象に－」『住総研 研究論文集・実践研究報告集』No.51、2025年3月

高道の研究は、伊豆大島最南端に位置する波浮港集落の空間的変遷に関する報告である。近代以降、東京との関係性が模索されるなかで、都市の辺境・周縁であった島の立地が、むしろ外洋へと連なる玄関口へと意味づけが変化し、そのなかで集落が急速に発展拡大していく様子を明らかにしている。

内藤の研究は、同じく伊豆大島の波浮港に現存する旧網本である旧甚ノ丸邸主屋に付随する庭園の技術・意匠的な特徴をまとめたものである。大島産の石材の導入や、池泉の水に島独自の水利機構である天水井戸を利用するなど、島独

自の環境文化特性に影響を受けた庭園表現が見られることを明らかにしている。

金谷の研究は、新島本村における近世近代の集落景観の変遷過程を明らかにし、地域の固有資源であるコーガ石を用いた建造物が歴史的にどのように位置づけられるか、検討を行ったものである。

以上、今年度は各研究員の研究成果を中心に本プロジェクトは進められてきた。今後の研究計画としては、まず早ければ今年度中、遅くとも次年度の早い段階で、まずはこうした成果を共有し議論を深めていくための勉強会を開催することを予定している。それを踏まえつつ、今後の展望として、伊豆諸島の他の島や小笠原諸島、さらには東京湾の島々などにまで調査対象を広げながら、江戸東京の島への理解を深めていきたい。



図1 大島町波浮港旧甚の丸邸の庭園調査（2024年6月）



図2 旧甚の丸邸外観



高道昌志（たかみち まさし）

1984年富山県生まれ。2016年法政大学大学院博士後期課程修了。2018年より東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教。専門は近代都市史・建築史、まちづくり。東京を中心に水辺環境と住空間の歴史的変遷についての研究と実践活動を行う。主な著書に、高道昌志『外濠の近代～水都東京の再評価』（法政大学出版局、2018年）がある。

6

Project 6
「Tokyo Time Travel」
東京街歩きツアー事業

法政大学文学部地理学科教授、プロジェクトリーダー 米家志乃布

2023年度からの準備期間を経て、江戸東京研究センター監修の「Tokyo Time Travel」の販売が始まりました。本企画は、法政大学江戸東京研究センター（EToS、エトス）が監修し、公益財団法人東京観光財団（TCVB）が実施する、外国人旅行者向けの、東京の歴史と街なみを楽しむ有料のウォーキングツアーです。

ツアーのコンテンツは、陣内秀信特任教授、田中優子特任教授、米家志乃布センター長が中心となって作成し、様々な史資料を用いた案内ルートの提案、猛暑のなかでの実踏、案内の通訳ガイドの方々への研修などを担当しました。2024年度は以下の5コースを2024年11月20日（水）よりあらかじめ設定されたスケジュールで催行しました。ツアーはすべて全国通訳案内士による英語で行われました。

- ① 銀座&築地コース
出発地：帝国ホテル東京
ハイライト：銀座の路地、稲荷神社、歌舞伎座、築地場外市場など
江戸を基盤として、町人商人が生活を営む場として商業・エンターテインメントの発信地として発展してきた銀座・築地の

町に残る痕跡を辿ります。

② 皇居&江戸城コース
出発地：帝国ホテル東京
ハイライト：桜田門、東京駅&丸の内周辺、東御苑など
江戸城を中心に据え、水路によって区切られていた街それぞれの役割、その名残を感じるとともに、東京と世界のほかの主要都市との違いを学ぶコースです。

③ 上野&浅草コース
出発地：ノーガホテル 上野 東京
ハイライト：不忍池、上野東照宮、かつぱ橋道具街、浅草寺、浅草神社など
上野・東叡山寛永寺の膝元で発展してきた寺町、職人の町の活気を体感しながら、浅草へと続く歴史を振り返ります。

④ 上野&谷中コース
出発地：ノーガホテル 上野 東京
ハイライト：清水観音堂、上野大仏、旧吉田屋酒店、根津神社、谷中銀座など

比叡山に見立てて創建された寛永寺の影響の残る上野と、その北側の東京の人々の生活の面影を残す下町風情を残す街として親しまれる谷根千を巡ります。

⑤ 渋谷コース
出発地：セルリアンタワー東急ホテル
ハイライト：金王八幡宮、宮益御嶽神社、円山町、鍋島松濤公園など
渋谷川の流れによって起伏に富んだ地形に育まれた生活・文化を感じつつ、渋谷のイメージをくつがえすような「江戸」の面影を探すコースです。

ツアーの詳細は以下の東京観光財団のウェブサイトをご覧ください。
<https://www.tokyo-time-travel.com>



米家志乃布（こめいえ しのぶ）
法政大学文学部教授。
1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報－日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験－江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）。



写真2 ビル街に佇む神社（2024年9月17日渋谷コース下見）



写真3 雨の上野公園を歩く（2024年9月25日上野コース下見）



写真1 渋谷に残る料亭と高層ビル（2024年9月17日渋谷コース下見）



写真4 浅草カッパ橋商店街（2024年9月25日浅草コース下見）

講演会

「16世紀の驚き：日本にとっての西洋との初めての出会い」

開催日：2024 年 4 月 14 日（日）

場所：法政大学 市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26 階 スカイホール（対面開催）

講師：クリスティーナ・カステル＝ブランコ（リスボン大学教授、ランドスケープ建築家）

通訳：高川 定義（元外務省在ポルトガル日本大使館公使参事官）

ポルトガル人のランドスケープ研究者でルイス・フロイスに関する大部な著作（Luis Frois:First Western Accounts of Japan’s Gardens, Cities and Landscapes, Springer,2020））を出版したクリスティーナ・カステル＝ブランコ教授をお招きし、4月14日（日）の午後、法政大学市ヶ谷キャンパスのポアソナード・タワー26階のスカイホールで、「16世紀の驚き：日本にとっての西洋との初めての出会い」と題し、この本の紹介を中心にルイス・フロイスに関する講演会が開催された。

ルイス・フロイスといえば、ポルトガルのイエズス会宣教師で、16世紀後半の37年間に渡る日本での経験を膨大な手稿に残したことで知られる国際交流史上、極めて重要な人物である。岐阜城や安土城への訪問、織田信長、豊臣秀吉、千利休らとの対話について報告したことで注目される。

フロイスをめぐる幅広い観点の中でも、今回は、カステル＝ブランコ教授の専門の立場から、16世紀後半の日本の文化全般、宗教施設、庭園や茶室、都市、風景などをフロイスが西洋人の目でいかに観察し、その特徴を表現したのかを比較文化研究の視点で論じてもらった。

カステル＝ブランコ教授は、リスボン大学農学部でランドスケープ・アーキテクチャーの学位を取得。フルブライト奨学金を得て、マサチューセッツ大学で修士号を取得。その後、リスボン大学教授として、ランドスケープ・アーキテクチャーの歴史、修復、エコロジカル・デザインを研究してきた。ユネスコ・イコモスなどの文化機関や政府機関において、文化的景観の領域で国際的に活躍し、2015年にフランス政府より芸術文化勲章オフィシエ、さらに2020年には日本政府より功労賞を授与されている。

そもそも私とカステル＝ブランコ教授との出会いは、ユネスコの世界遺産登録を目指すイタリアのトスカーナ州キャンティ・クラシコ地域のワイン・コンソシアムが主催するオンライン会

議に、お互い国際委員で参加していたことから生まれた。カステル＝ブランコ教授が大の日本最顶层で、私が日本での世界遺産登録を目指す地域の例として京都の宇治地域で行った調査結果を報告した際にも大きな関心を示し、日本のお茶を毎日飲んでいるとも話され、私も親近感を覚えていた。その後、彼女がルイス・フロイスに関する前述の著作（英文）を刊行したことを知り、すぐ電子書籍で購入して目を通したところ、これは、外からの眼で日本文化の本質を対象化し研究するという意味で、まさに法政の国際日本学研究所にとってぴったりのテーマだと直感し、同時に法政の江戸東京研究センター、さらにはエコ地域デザイン研究センターにとっても大いに関心のあるテーマであるに違いないと考えた。幸い、カステル＝ブランコ教授が3月から4月にかけて来日されるという話を伺い、その滞在中の機会を捉え、法政大学での講演をお願いできないかと打診したところ、喜んで引き受けるとの嬉しい回答をいただいたのである。

早速、法政学内の関係メンバー、特に国際日本学研究所の横山泰子所長と相談し、このテーマに最も相応しく、しかも講演会開催の予算枠を持つ国際日本学研究所に主催をお願いし、加えて江戸東京研究センターとエコ地域デザイン研究センターの共催という、法政の3つの研究所、研究センターがコラボする画期的な形での開催が実現できたのである。

それからは、具体的にどういう形で講演会を企画するかを関係者の間で話し合った。まず、通訳をつけるかどうか。英語で講演してもらう場合は、どうしても研究者仲間での少数の閉じた講演会にならざるを得ない。だが内容が興味深いだけに、英語で講演し、逐語訳の通訳をどなたかにしていただくという道を探った。幸い、国際日本学研究所の小口雅史先生が長年親しくしてこられた元外務省在ポルトガル日本大使館公使参事官の高川定義氏をご紹介下さり、快く通訳をお願いいただいた。ポルトガル語も英語も堪能で、ポルトガルの歴史、文化を知り尽くした方である。しかも幸運なことに、高川氏が講演者のカステル＝ブランコ教授を以前からよくご存知で、ポルトガルでお会いしたことがあるとのことで、早速、2人の間でのメールのやり取りも始まり、その後、講演の準備を実にスムーズに進めることができた。あらかじめ講演内容のパワーポイントのデータに加え英文テキストも送っていただき、高川氏が目を通して下さり、講演当日も早めに会場に行って控え室で入念なりハーサルもしてもらえた。

となれば、できるだけ大きい会場をとって専門家に限らず、幅広い層の大勢の方々に聞いていただきたいと考えた。幸いにもポアソナード・タワー26階のスカイホールを予約でき、打ち合わせのための控え室、簡単な懇親会用に同じフロアーのラウンジも確保することができた。

ここまで段取りできれば、あとはせっかくの価値ある講演をできるだけ大勢の方々に聴講して欲しいと思いつつ、宣伝の活動に力を注いだ。後から知ったのだが、カステル＝ブランコ教授は2007年から毎年のように来日し、様々な大学、文化団体から招かれ講演、研究活動を行ってきたとのことで、日本で交流されてきた大勢の専門家の名簿を送って下さった。私のよく存じ上げる造園、景観、建築史、環境の市民活動家など、実に幅広い分野の方々の名前が並んでいるのに驚かされた。まずはその方々へ招待メールを送り、そして私の属する地中海学会、都市史学会、さらに関係する研究グループなどに依頼し、幅広く広報をしていただいた。もちろん国際日本学研究所のホームページ、江戸東京研究センターとエコ地域デザイン研究センターのネットワークでも宣伝をした結果、嬉しいことに、コロナ明けとしては最高とも思える120名を越す応募があり、それ以上を受け入れると長テーブルに3人掛けとなって密な状態が避けられないため、講演の2日前に受付を締め切らせてもらった。当日は90名を超える老若男女の大勢の方々が参加し、久しぶりにスカイホールに熱気が漲る雰囲気なかで講演会を実現できた。

カステル＝ブランコ教授の刺激溢れる興味深いプレゼンテーション、そして高川氏による実にわかりやすい見事な逐語訳で、トータル2時間強の講演があつという間に終了。前半、後半のそれぞれの講演後、様々な専門、立場からの多角的な視点からの面白い突っ込んだ質問が続出した。そのどれにもカステル＝ブランコ教授がさすがと唸らせる素晴らしい応答を示し、1時間以上に渡る白熱したディスカッションが続いたのである。日本での講演会では滅多に見られない嬉しい光景だったと言える。周到な準備から当日の講演・質疑応答の通訳まで大役を務めて下さった高川定義氏には心からお礼を申し上げる。

なお、講演と質疑応答の内容については、通訳を担当された高川氏に次にご報告いただく。

（陣内秀信）



16世紀の驚き：日本にとっての西洋との初めての出会い
The surprise of 16th century Japan's first encounter with the West.

ポルトガルのイエズス会宣教師、ルイス・フロイスは、16世紀後半の37年間の日本での経験を膨大な手稿に残した。岐阜城や安土城への訪問、織田信長、豊臣秀吉、千利休らとの対話についても報告している。
ランドスケープ研究者でルイス・フロイスに関する著作を近年出版されたカステル＝ブランコ教授を招き、彼が日本の庭園、都市、風景を西洋人の目でいかに観察し、その特徴を表現したのか、比較文化研究の視点で論じてもらう。

日時	場所
2024年 4月14日 （日） 13:00～16:20	法政大学 市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26階 スカイホール

講師
クリスティーナ・カステル＝ブランコ
PROF. CRISTINA CASTEL-BRANCO
リスボン大学教授
ランドスケープ建築家

通訳 高川 定義氏
元外務省在ポルトガル日本大使館公使参事官

形式 | 対面開催

対象 | 参加費は無料ですどなたでもご参加いただけます

お願い | QRコードから事前に参加申込をお願いします

主催 | 法政大学国際日本学研究所

共催 | 法政大学江戸東京研究センター
法政大学エコ地域デザイン研究センター

 **法政大学**
HOSEI University

法政大学国際日本学研究所
東京都千代田区富田2-17-1
Email: nihon@hosei.ac.jp

 **IJORS**
Hosei

遠藤周作氏の小説とは趣を異にするが、1543～1600年の約60年間は日欧の文化が信頼と相互授受により固く結びついた時代であった。これはイエズス会士フロイスに因るところが大である。43年の長きに亘り日本に滞在し、日本語を習得し最高権力者達と渡り合った。また、『日本史』など、ヴァチカン図書館に総計四千ページもの文献を残している。さらに信長や秀吉がキリスト教を保護するように尽力した。この60年間の両国関係が協調的なものであり、両者間の信頼感が中心的な役割を果たして二つの文化の間の交流や相互伝搬を可能にしたのだ、とフロイスを読んで確信した。フロイスは事実上の大使として日本文化を率直に尊敬し敬愛した。そのため、信長と交渉して布教を可能ならしめたり、千利休と交渉して秀吉がキリシタンの信教の自由を保証するように訴えかけることもできる理想的な人物となった。信長を始めとする戦国大名達は鉄砲に関心を抱き、封建社会の勢力関係の変化と国家統一をもたせせた。地球が丸いことや、漢方には見られない外科手術などの西洋医学を日本人が初めて学ぶこととなった。また、知識階級は南蛮船で

16

17

到来した文物に好奇心を抱き、地図製作から造船術、医学、栄養学、美術に至るまで、目新しい文物がポルトガル商人や、その7割がポルトガル人で占められたイエズス会士達によって紹介された。商人達はポルトガルとの交易により利益を得たため、ポルトガル、インド、マカオからもたらされる文物に関心を抱いた。

庶民層もポルトガル人の来訪により裨益した。フロイスは、豊後（現在の大分県）で孤児を養っていた自分たちの住居の傍にルイス・デ・アルメイダが病院を開設したと書き残している。松田毅一氏に拠れば、1557年までには豊後国府内（ふない。現在の大分市）に病院が開設され、アルメイダが院長を務めていた。ハンセン病患者やその他の病人達はキリスト教的慈悲の一環として社会的支援を得ることができた。現地には記念碑が残っている。神父たちは日本人が見たこともなかった病院を開設した。宣教師ルイス・デ・アルメイダの治療を受けるため多くの人々が殺到した。医学分野におけるポルトガル人の影響は大きく、短期間で知識が日本人に伝えられ、確立され、そして広まった。

日本の学芸・技術に大きな影響を与えたポルトガルなど欧州諸国との交流は百年も続かなかったが、私の著書は両文化間の穏やかな信頼と相互授受関係が続いた60年間のみを扱っている。この時期に当たる1563年にフロイスは来日するが、1984年にマイケル・クーパーが毎日デیلیーに書いたフロイス像を引用したい。

1532年にリスボンで生まれ王室書記官として働く。イエズス会入会。1563年日本に到着、1589年に『日本史』を執筆。34年間日本で布教し1597年長崎にて没。

フロイスは、日本における教会の進展と挫折を欧州の読者に伝える詳細な宣教報告書を執筆・編集し、また、朝鮮出兵や1595年の豊臣秀次の自害など、時事的な話題についても綿密な記述をまとめている。イエズス会総長アクアヴィーヴァ神父の依頼により『日本史』全5巻を編纂したが、1591年に宣教師達が秀吉に謁見した際の献上金の額や各宣教師に下賜された絹や銀の分量を詳細に記していることからフロイスの綿密な性格が窺える。1596年の秀頼3歳時の参内などに関する記述も日本側の記録と殆ど完璧に一致している。信長や秀吉と面識があり、信長は時に何時間にも亘りフロイスから西洋の生活・慣習を聞き出そうとしたので、フロ

イスが日本の出来事につきの確な記述ができたのは当然とも言える。ルイス・フロイスは並外れた年代史家であると言える。

欧州伝来の諸文化に日本人の眼を向けさせるためには不可欠な信頼関係の醸成にフロイスは貢献し、両国関係に不可欠な四つの使命に関わっていた。即ち、千利休のような最大級の影響力の保持者達との接触、日葡両文化に根ざした長崎の建設、宗教や科学、知識を振興した数多くの神社仏閣への訪問、そして、『日本史』や『日欧文化比較論』の中に恰も現在の写真機のごとく、但し、画像の代わりに言葉を用いて日本のあらゆる事象を事細かく記録した。

フロイスはカトリック僧であったが、仏教寺院庭園や東屋にも識見を持ち、異質の美学や異なる宗教への寛容さを披瀝した。イエズス会士達以外にも他者を理解した者はいたかもしれないが、少なくともイエズス会士達以前に、欧州の枠組みから自らを解き放ち他者の世界に入り込んだ者はいなかったであろう、と文筆家のエドゥアルド・ロウレンソも述べている。フロイスは自らとは異なった日本人社会に入り込み友人を作ったのだ。『日欧文化比較論』において、フロイスは611もの文化比較を行い、日本の慣習、文化、芸術、建築、食物、農業、造園などにおける相違を、批判する代わりに受容している。

日本人は蹴鞠を嗜み欧州ではボールを手で扱う。日本人は桜の枝を手折り欧州ではサクランボを摘み取る。洋服は体型にぴったりと合致し、和服はゆったりと纏うので、いとも容易く上半身を晒すことができる。欧州女性はすぐに白髪になるが、日本女性は油で手入れするため還暦を迎えても髪は黒々としている。欧州女性はピアスを用いるが日本女性はイヤリングを用いない。欧州では大きな眼を愛でるが日本人は切れ長の眼を好む。

『日欧文化比較論』は1993年にフランスの社会人類学者クロード・レヴィ＝ストロースにより仏語版が出版されている。彼は、二つの文化は類似と同時に差異を現し恰も鏡に映る像のようだと述べ、フロイスの著作が如何に異文化の奇異感を封じ込め親近感を抱かせたかを論じている。日本では当初の60年間は平穏に文化の授受が行われた。今でも日本の料理本で扱われている天ぷらやカステラ、南蛮漬けのようなものまでが伝えられた。

茶の湯の大家で信長や秀吉の茶の師匠でもあった千利休は庭園の設計や戦国の知略においても重きをなした。茶の湯自体も日本社会の種々の振る舞いを定める大本となった。三千頁に及ぶ日本史の中で宗易の名を辿ると興味深い記述に出くわす。

『高山ジュスト右近は、関白秀吉を自分と親しい宗易と同時に招き、宴の最中に二人してキリシタン保護を強く訴えたため、遂に秀吉はこの件に触れることを禁ずるに至った。』この報告から明らかなのは、利休自身は仏教徒にも拘わらずキリシタン大名の右近と親しく、また、フロイスとも友人であったことである。イエズス会士達は茶を好み、「ティー」ではなく『茶』の名でポルトガル本国に紹介した。また、茶の作法に用いる抹茶箱をカトリックの典礼に用い、茶室の建築様式を礼拝堂に用いマカオでも採用した。利休は、聖体拝領を参考に茶の湯の儀礼を改めた。

京都で武者小路千家の千宗守家元と会ったが、彼もカトリックの典礼が茶の湯に与えた影響を理解していた。利休はにじり口を導入したことで知られるが、武器を持たずに腰をかがめて入室し互いが対等に接する空間は、キリスト教の求める謙虚、友愛、平等の三つの要素と平和をも満たすものでもあった。これらの事実は、弾圧と隔離の期間を経て、今なお二つの宗教の枢要な互惠関係が続いている証左である。更なる研究の価値があろう。

長崎の街は友好的共生関係を象徴している。二つの文化が融合し1560年当時の寒村が革新的な都市計画を経験することとなった。そして外国船が出入りする貿易港として日本を世界と結びつけた。長崎港の歴史は独特である。イエズス会士達がリスボンを出て東アジアに向かう際には既にリスボンの街並みがその脳裏にあった。テージョ河口の広い湾、平地部を取り囲む丘の上にそびえる城塞、広大な埠頭前広場、西側斜面にそそり立つカルモ修道院などがリスボンの特徴的風景と言える。また、水との関わりも密接で、多くの船が水面を覆う光景はルネサンス期のリスボンの特色であり、17世紀初頭に日本人画家が描いた神戸美術館所蔵の屏風にも再現されている。

長崎の建設に当たった日本側関係者達には古都の奈良や京都の先例も参考となった。平地部の碁盤目街路、川の流れと土地の起伏、周囲の山々に残された自然林などは奈良の都市設計の特色と言える。日葡両国の関係者達が、奈良・

京都を参考に長崎の都市設計に応用した要素も幾つかある。

大型船向きの深い湾、ポルトガルの都市には必ずあるが日本の他の都市には見られないような埠頭前の広大な広場、ポルトガルの都市には欠かせないが日本には見当たらない丘の頂上や斜面の街並み、ポルトガルでは希だが日本の都市には必ず見られる橋の架かった開渠、17世紀以前のポルトガルでは見られない平地の碁盤目街路、と言ったものである。

長崎の領主で、ドン・バルトロメオという洗礼名を持つ大村純忠は、貿易を振興し周辺地域も均霑した。また、ポルトガル人達は日中貿易に深い関心を抱いた。純忠は長崎をイエズス会士達に与え、会士達は長崎の都市建設のため日本人と協力した。この結果、長崎は両国民の平和と共通利害と尊敬と相互関心により設計された日本初の国際都市となった。長崎の人口は急速に拡大することとなったが、これは街が人口増に対応するよう設計されていた証左でもある。1579年の長崎は400戸程度の寒村であったが、1590年には人口5,000を誇り全国にその名を知られるに至った。17世紀初頭に人口は15,000を数えるに至る。

リスボンも長崎も地形は似ている。湾が広くて深く、また、艦船が狭い回廊を通過して出入りする必要がある、16世紀当時の港湾防衛に用いられた大砲の射程に入らざるを得なかった。大型船による大航海を通じて長崎は世界に向けて開かれた街となった。この街の独特の国際融合は市内の観光ルートを巡れば確かめることができる。多文化共生が求められる国際化の進む世界において、長崎を中心とするこのような相互受容は融合型都市設計の好例とも参考ともなろう。これは当時の社会においては珍しく、また、両国の文化を相互尊重と協調の好例とすることとなる。

ポルトガルのイエズス会士達は京都や奈良における仏教寺院や神道社殿、宮城や庭園を賛美している。協調と相互関与が支配したこの時代に、フロイスは京都の17、奈良の6つの庭園、また、9つの重要な都市につき書いている。私はこれらの場所を訪れ、写生し、撮影し、これらの街の庭園に関するフロイスの記述と比較してみた。日本とポルトガルの協調的関わり方の例として、フロイスが描いた京都と奈良の庭園を取り上げたい。彼は驚くほど数多くの庭園の芸術性につき述べている。

京都の清水寺は1565年に訪れ美しい泉について語っている。東寺や京都御所の斎庭（ゆにわ）、東福寺通天橋や三門、大徳寺など数多くの名所を挙げている。奈良では6つの旧跡を語り、特に興福寺、春日大社、東大寺を挙げている。私の著書においては、これらの名所旧跡は歴史と図像学により説明されている。鹿島奨学金を得て東大史料編纂所を訪れ、岡美穂子先生に多大のご支援を頂いた経緯がある。南蛮屏風には、外来船によりもたらされた珍しい品々が、顔料や金箔と千年の歴史を持つ日本画の技術を用いて、350年の時を隔てて表現されている。今日までに91の南蛮屏風が発見されているが、何故英国人やオランダ人が描かれなかったのだろうか。

なお、『日本誌』の執筆で知られるエンゲルベルト・ケンペルは、日本とポルトガルの文化が類似している原因として、緯度が近く気候が類似している点を指摘している。

（高川定義）

シンポジウム

「水都江戸東京シンポジウム『水都東京の近未来を考える』～テリトリーオの視点から～」

開催日：2024年7月25日（木）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアノードタワー 26階スカイホール（対面開催のみ）

本シンポジウムは、「水都東京エコヒストリー」（神谷博著）の出版を機に近未来の東京のサバイバルについて議論を交わすこととした。法政大学エコ地域デザイン研究センター（エコ研）では2008年サラゴサ水博においてDVD「水の上の都市・東京」を発表している。東京の基本構造は江戸時代につくられ「水都江戸」が誕生した。しかし、それを受け継いだ水都東京は、近代の大規模な都市開発、ライフスタイルの変化で水都の性格を大きく失い、さらに地球温暖化の進行が危機的状況に至り、今や都市環境を如何に存続できるかが問われている。東京の本来の基盤である「水都」としての地域構造、環境システムを深く掘り下げて理解し、その再生に向けての思想と手法を磨く必要がある。法政大学エコ地域デザイン研究センターの原点を振り返り、法政大学江戸東京研究センターに連なる近未来への視点を踏まえて「水都東京」の存続について議論を交わした。

＊

初めに、基調講演として中村桂子（JT生命誌研究所名誉館長）氏から「生命誌から見る水都東京／エコヒストリー・テリトリーオに学びながら」というお話をいただいた。中村氏は「日本のレーチェル・カーソン」と呼ばれることもあるように環境への深い洞察力を持たれており、今回の難しいテーマに取



【生命誌絵巻】 協力：田まりな 画：橋本律子

り組むにあたり道灯りを燈していただいた。「人間は生きもの」であり「人間は自然の一部」であることを初めに押さえ、「生物誌絵巻」を示された。

植物と昆虫の関係や多様で複雑な生態系の在りようを示す一方、自然としての人間（ヒト）の生命や内なる自然である身体、心（時間・関係）といったものを金融資本主義と科学主義が破壊してきたことを突いた。また、理科で考える重要性として、20世紀までは物理や化学により法則性や部分・因果といった人工（科学技術）が重視されてきたが、21世紀以降は地学や生物により複雑系や全体システムとしての自然（生きものとしての技術）を考えることが重要になってくることを示された。そして生命誌の世界観として、古代～中世の生命論、近代の機械論（科学）に対して21世紀は新しい生命論（生命誌）の時代であると説いた。生命誌から生まれた世界観とは、ヒトとしての「私」と人間としての「私」を対面させ、「本質を問う（内発的）」「時代認識を持つ」「権力からの自由」が重要であると語られた。最後に、「愛ずる」ことの大切さを強調し、堤中納言物語の虫めずる姫の詩を取り上げた。「鳥毛蟲の 心深きさましたるこそ 心にくけれ」「かたつぶりのお つののあらそふや なぞ」

＊

続いて主題講演1として、森田喬（法政大学名誉教授）より「2008年サラゴサ水博出展の経緯と今後に向けて」と題して講演があった。森田は15年前を振り返り、次のように述べた。「2008年のサラゴザ万博時点では、それまでに1995年の阪神淡路大震災は経験していたが、その後の2011年の東日本大震災（地震津波、放射能汚染）、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、2024年能登半島地震、などの大災害、あるいは近年の世界を覆うコロナの流行、世界各地の国際紛争など、悲惨な状況がつくりだす重苦しい世の中の雰囲気はなかった。」「当時の感覚に基づき、水を軸にエコシステムとしての東京を時間的にも空間的にも大きなスケールにより可視化してその特徴を探ろうと展開が図られた『水の都市東京』は意識しないと日常性からは見えにくい？」「今日では、より厳しい条件の下での発想が求められている？」「厳しい条件下での『水の都市東京』の可視化が必要？」

そしてDVDを流して振り返り、水と緑を生かした環境整備には巨視的視点と微視的視点の両面（分野により視野が異なる）から整合性のある“tangibleな可視化”が必要と指摘した。そこから、流域（異常気象・地震災害を考慮した地形・水系＋生態＋生活）システムを踏まえた計画すなわち「流域テリトリーオ計画？」へと展開するのではないかと結んだ。

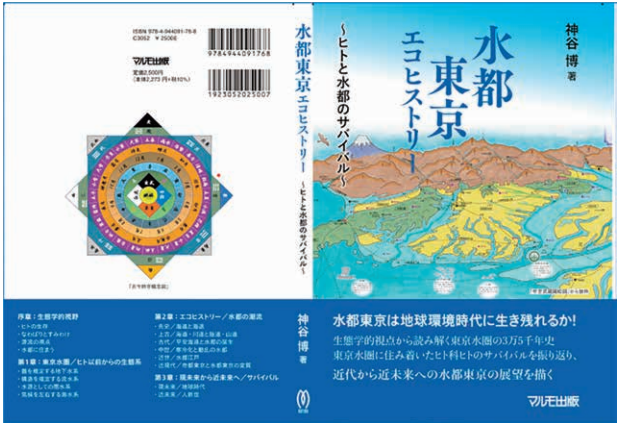


＊

続いて、主題講演2として、神谷博（法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員）より「水都東京のエコヒストリーとサバイバル」と題して講演があった。

はじめに、この7月に出版された「水都東京エコヒストリー」について目次に沿って概要が示された。序章の「生態学的視野」では、ヒトの生存、なわばりとすみわけ、源流の視点、水都に住まう、という基本的視点を押さえ、第1章「東京水圏／ヒトと生態系」では「水から見ると東京が日本の首都である理由がわかる」という根拠として東京水圏を地下水系、流水系、雨水系、海水系の4つの水系からひも解いた。そして、第2章の「エコヒストリー／水都の潮流」では、先史／海進と海退、上古／海道・川道と陸道、山道、古代／平安海進と水都の誕生、中世／寒冷化と動乱の水都、近世／水都江戸／近現代／帝都東京と水都東京の変質、というエコヒストリーの流れを簡単に紹介した。第3章「現未来から近未来へ／サバイバル」について今回のシンポジウムの趣旨に照らして少し紹介した。さらに、「近未来と水都東京」について、まとめとして「近未来東京への展望」を示した。「東京は水条件から大きく3つの地域に分けられる。それぞれに居住地としてのサバイ

バル戦略を描く必要がある」とし、武蔵野地域水網緑網都市構想、山手地域庭園都市構想、下町地域ラグーン都市構想が紹介された。



＊

休憩をはさみ、3つの講演が行われた。

講演1は、小野一之（府中市郷土の森博物館元館長）氏から「水都東京の基層～古代中世・武蔵国府からの景観」という視点から講演をいただいた。枠組みとして、江戸時代に形づくられた「水の上の都市東京」の基層に、国府を中心にデザインされた海と川に関わる古代中世武蔵国の原型を想定してみたい、として「古代武蔵国の地域デザイン」「万葉集からみた武蔵国の景観」「国府祭礼からみた武蔵国の構造」の3点について話された。まず、「古代武蔵国の地域デザイン」として、8世紀初頭＝律令国家の成立、武蔵国の誕生、7世紀中頃～後半＝乙巳の変（大化改新）地方行政制度（国・評・里）施行、列島に七道（官道）の敷設、60余の国・島に国府を設置、武蔵国（无耶志国）多磨郡（玉評）の現府中市に国府設置、東山道武蔵路と多摩川の交点を国府の地に選定、熊野神社古墳（上円下方墳）の造営、について語り、次に「万葉集からみた武蔵国の景観」として、万葉集全20巻4500余首、律令国家が拡散させた和歌文化、巻14東歌・巻20防人歌掲載、武蔵国東歌 9首＝多摩川・武蔵野（5首）・入間道・埼玉の津、武蔵国防人歌12首＝多摩の横山、いずれも国郡名を冠した地名、国府からの景観、多摩川＝国府近傍の川、武蔵野＝国府周辺の野、多摩の横山＝対岸の丘陵、埼玉の津＝利根川水運、入間道＝入間郡へ向かう東山道武蔵路、などについて話された。そして、「国府祭礼からみた武蔵国の構造」として、11世紀後半頃＝武蔵国府に総

社創建、武蔵総社・六所宮、祭神＝一宮（小野社）・二宮（二宮社）・三宮（氷川社）・四宮（秩父社）・五宮（金鑽社）・六宮（杉山社）、大國魂神社例大祭（五月会・武州祭・くらやみ祭）、競馬式（5月3日夜）・神輿渡御（5月5日深夜）・御旅所神事、潮盛り（4月30日・品川海上禊祓式）、御旅所神事（神の再生儀礼）・潮盛り（神迎えの儀礼か）、武蔵国府と品川湊の関係演出か、等について語られた。

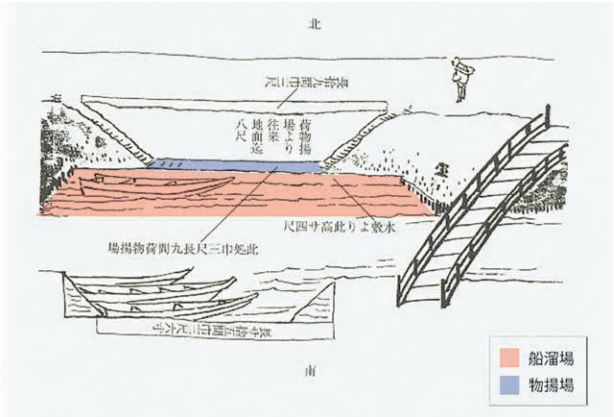


大國魂神社くらやみ祭の様子

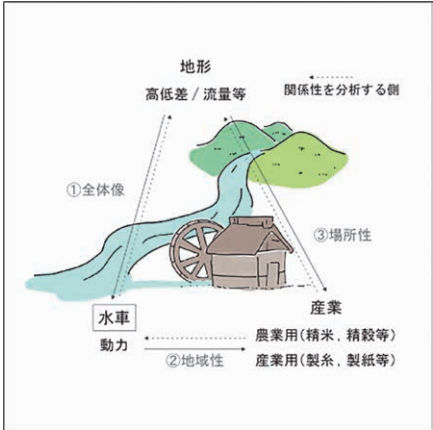
＊

続いて、講演2として、高村雅彦（法政大学教授）及び卒業生の、照沼和佳奈、中釜英里香から、「玉川上水の船溜と水車が果たす東京の都市化」と題して研究発表があった。発表は2題あり、一つ目は、照沼和佳奈による「玉川上水通船における河岸空間の場所性－船溜と都市構造に着目して－」であった。研究目的は、通船が行われていた明治初期の玉川上水を対象に船溜図を用いて分析を行い、河岸空間の場所性を明らかにすることで調査結果の報告があった。結論として、玉川上水の通船事業は関東圏を超えた広域ネットワークの中で計画された、船溜場はそれらの地域をつなぐ網目状の交通網の上で、かつ時代のレイヤーの上で計画された、広域ネットワークの中での地域の機能＝場所性が船溜場の形状に影響を与えていた。二題目は、中釜英里香による修士論文『水車と産業－元禄期～昭和期における江戸東京の都市－』をもとに「水車が果たす東京の近代化」であった。研究目的は江戸東京で利用された水車に関する資料の収集と分析であり、3つの観点「地形／産業／水車」から分析・分類することで、「地形が生み出す東京の近代化」を明らかにした。結論として、「複雑な地形を読み込んだ上で、都市構造や産業形態、空間構成の近代

化が進んだ」ことが明らかになった、と結んだ。



船溜場（照沼）



3つの観点「地形／産業／水車」(中釜)

＊

最後に、講演3として鳥越けい子（青山学院大学名誉教授）氏より「水都東京の原風景と音風景の在り方－サウンドスケープ概念を踏まえた実践活動を事例として－」と題して講演が行われた。はじめに、サウンドスケープには森羅万象／調査の対象／相互作用の場、という3つのフェーズがあり、主体と外界の相互作用のなかに成立する環境である、と話された。そして、サウンドスケープとしてとらえる環境の特徴は、「いきもの」としてとらえる環境、時間軸で展開する環境、土地の歴史・記憶の重視、ホリスティック（包括的）な環境などである、と示した。まとめとして、環境（世界）の内実は実に複雑で奥深く、サウンドスケープ概念の特色とその存在意義のひとつは、異なる学問・専門分野の知見や技術を横断・融合するところにある。サウンドスケープは、サウンド（物理的な音）ではない。その本質は、形（物理的資源）を超えて世界と繋がろうとする感性・姿勢・行為にある、と結んだ。

＊



池の畔の遊歩音楽会

これらを踏まえ、パネルディスカッション「近未来の潤い豊かな水都東京を目指して」として意見交換を行った。コーディネーターは陣内秀信が務め、「東京テリトリーオの近未来」について導入を行ってから、パネリストの森田、神谷、小野、高村、鳥越が登壇した。はじめに、陣内より「水のテリトリーオ」これまでの振り返りについて話題提供があった。2006年に「東京エコシティ：新たな水の都市へ」シンポジウムが東京都と江戸東京博物館の主催で開かれた。エコ地域デザイン研究所も共催したが、まだオーソドックスな水都論だった。次に 「源流展：源流から海まで」が科学技術館（北の丸公園）で開催された。そして、2008年に「サラゴサ・水の万博」へ出展した。科学研究費助成事業（基盤S）に基づく研究では『水都学Ⅲ』を出版。「特集：東京首都圏 水のテリトリーオ」は、難波匡甫『江戸東京を支えた舟運の路－内川廻しの記憶を探る』がきっかけであり、エコ研小島先生による佐原の「佐原アカデミア」との共同研究につながっている。法政大学江戸東京研究センター（EToS）最初のシンポジウムとして「江戸東京の基層」（パネラー：神谷・谷口・高村、小野一之）があり、源流から解き明かす東京水圏の地域構造が議論された。東京湾については、「東京湾シンポジウム」が2024年に開かれ、EToS小林ふみ子を中心に実施された。外濠市民塾は福井恒明を中心に、2021年に「玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会オンライン講演会」を開催。2024年には「100年後の安心のためのTOKYO強靱化世界会議」がイタリア文化会館にて 官民学/産学官民一体で開催された。高村研究室の最近の成果として「江戸東京の用水と水車が担う都

市の近代化」、玉川上水の通船の研究、内藤啓太による「江戸東京の大名庭園にみる上水の影響に関する研究」などがある。これに関連してEToSによる「イタリア大使館の庭園調査」(伊予松平隠岐守屋敷跡)があり、東京農業大学粟野氏らと連携した。陣内個人としては『水都東京 地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』2020年の出版がある。また、エコ研鳥越けい子氏による善福寺池での研究と実践などがあり、EToSの皆川典久は「東京スリパチ学会」として一連の著作に水が深く関係。今回のシンポジウムに関わるこれまでのエコ研、EToSの流れを洗い出し、これを踏まえて議論を進めた。会場からも活発な意見があり、有意義な意見交換が行われた。

(神谷博)

シンポジウム

「江戸東京の史跡と都市空間」

開催日：2024年10月19日

場所：法政大学市ヶ谷田町校舎 5 階マルチメディアホール

近年、東京都心のあちこちで大規模な再開発や高層ビル建設などが進み、古くからある風景が失われている。近代的なビルに囲まれて現代の東京に生きる私たちが、江戸以来の歴史の積み重ねを意識する機会はまだである。都市の価値とは最新の技術や経済活動だけではない。その都市に生きた人々が積み重ねてきた文化や伝統の厚みがその基盤となる。そして、現在行われている社会経済活動もいずれは歴史となり、都市の価値の一部となっていく。

このような時間軸で東京という都市を考えると、江戸から明治・大正・昭和と続く激動の歴史のなかで、どのように人々は古いものを価値づけてきたのか、という問いが生まれる。それを端的に表す対象が史蹟/史跡という概念である。制度として振り返れば、大正8年の「史蹟名勝天然紀念物保存法」制定は、伝統的な人文・自然景観の変容を背景として、歴史的要素を価値づける重要なもので、その思想は戦後の文化財保護法に引き継がれていった。東京市・東京府において、それに応じた一連の動きはどのようなものだったのか。東京の戦災復興、高度経済成長期のなかで、文化財としての史跡や名勝はどのように保存され、活用されてきたのか。このような問いのもとで、本シンポジウムを開催した。

まず、清水英範氏が「ベックマンの東京計画—国会議事堂はなぜ、あの永田町の丘に建っているのか—」と題した基調講演を行った。井上馨の要請によりドイツから来日して官庁集中計画を立案したベックマンの東京計画について、経緯やその内容、特徴が紹介された。この計画は国会議事堂の位置を現在と同じ永田町の丘の上に示した初めての都市計画であるとともに、中央官庁街の計画にも影響を与えたとの視点から地図を用いた研究成果が展開された。ベックマンの計画では地形・地質・都市のパースペクティブ・道路線形の対称性が重視され、国会議事堂の位置はその計画において支配的な影響を及ぼしたことが指摘された。

その後の研究報告では、米家志乃布氏から、戦前東京の史蹟類型の変遷と東京市内での地域的特徴について報告され、本シンポジウムが対象とする射程が示された。江戸から東京への都市空間の連続性と断絶が取り上げられ、東京の

史蹟は、かつての江戸の範囲に存在する江戸史蹟が出発点であったが、史蹟保存制度の始まる大正期になると浅草や下谷、芝などで「著名なる人物」の墓地が重要な史蹟として増加した。多くの史蹟が関東大震災において打撃を受けたものの、霞が関などの官庁街における明治天皇聖蹟の指定へと展開していったことが紹介された。これらは近代日本における東京史蹟の独自性・特異性であることが指摘された。

次に内藤一成氏より、戦後の文化財行政、特に皇居の国史跡指定に大きな役割を果たした河合弥八が紹介された。戦後の皇居（江戸城跡）は宮殿の大半を焼失し、一刻も早い再建・整備が必要であった。1956年～1960年まで文化財保護委員長をつとめた河井弥八の残した「河井弥八日記」や「皇居造営録」「皇居造営審議会議事録」をもとに、彼の皇居造営計画に対する考えや宮内庁などの関係諸機関と河井のやりとりが紹介された。河井弥八の考えが現在の皇居東側地区の在り方につながり、その後の江戸城跡の保存や国指定史跡の指定にもつながったことが指摘された。

続いて齋藤智史氏より、東京市公園課長を務めた井下清のもと、東京市が取り組んだ公園と史蹟保存の連携施策が紹介された。井下清による史蹟保存論の全体的な特徴が論じられた後、実際の史蹟保存事例と井下の言説が並列して紹介された。公園行政の立場から史蹟保存に関わった井下は、破壊と建設の著しい東京という大都市のなかで、公園を用いた史蹟保存により、史蹟の意義が人々に理解され、利用されるような設計を目指していたことが指摘された。

高道昌志氏からは、史跡の現代的意義として、歴史・文化性を備えた史跡の有効活用が、地域の暮らしやコミュニティを育み、より豊かな都市環境が実現されることが述べられた。江戸城外濠について、その保存の歴史と現在までの史跡空間の変遷が紹介された。東京の地域資源の活用を考えるうえで、江戸城外濠は重要な事例であり、現在の地域の文脈のなかで江戸城外濠をとらえなおす必要性が指摘された。

根崎光男氏は、浜離宮恩賜庭園の各時代における歩みを、利用状況を含めて詳しく振り返った。浜離宮は江戸時代には甲府藩の浜屋敷あるいは将軍の浜御殿として機能し、明

治以降は宮内省管轄となる。戦後、東京都に下賜され、浜離宮恩賜庭園となって一般開放された。昭和27年には国の特別名勝および特別史跡に指定される。その後、残存史跡の保存と喪失施設の復元事例が紹介された。長期間にわたる歴史のなかでの史跡の活用の在り方や復元の基準には複雑な問題があり、史跡保存の方針についての議論が必要であることが指摘された。

これらを踏まえて森田喬氏より全体に対してコメントされた。過去から将来に向けた時間軸の中で史跡の価値を論ずる必要性、また都市の実空間における史跡のあり方の議論の必要性が言及され、その有効な手段として地図・GISが有効であることが確認された。

(福井恒明)

法政大学江戸東京研究センター「地理情報システムと名所の景観」プロジェクト シンポジウム

江戸東京の史跡と都市空間



[江戸時代中期の江戸城下町]（東京都歴史文化資源データベースより転載）

近年、東京都心のあちこちに大規模な再開発が進展している。江戸時代の都市構造や生活様式を鑑みながら進められている。歴史的建造物に囲まれた人々も、身近にある文化遺産の価値の上に立ち寄りつつある。現在注目されている社会経済活動はすべてが歴史であり、都市の面影の一部が残っている。

江戸・川崎編、大正・昭和初めに展開する郊外の発展など、二つの時代に亘って異なる都市像は、なぜかその姿を残し続けている。それを基盤にした都市の歴史・地理をめぐり、文豪にも関心があった当時の知識人は、史料から読み取りたい資料を探していた。継続的な調査を通じ様々な発見を得た。本シンポジウムでは最新の研究成果を発表したい。東京都庁・東京市役所に沿って、実際のまち歩きを通して学問的考察を深める機会がある。会場によって文庫館や各福祉施設との交流を行う。会場近くで食べることも。

参加申し込みには、東京市の関係機関に対する事前予約が必要。史料館への利用希望者は、事前に事前予約を行い、入場券の有無を確認することになる。また、当日の開催状況に応じて施設変更を必要とする場合があります。

プログラム

- > 趣旨説明**
堀井恒明（法政大学デザイン工学部／ETOs 兼担研員）
- > 基調講演**
ベックマンの東京計画
——国会議事堂はなぜ、あの永田町の丘に建てているのかー
清水英範（日本測量協会会長／東京大学名誉教授）
- > 報告**
東京の史跡・史蹟と地域性
東家志乃希（法政大学文学部／ETOs センター長）
江井弥八と文化財保護行政
内藤一成（法政大学文学部／ETOs 兼任研員）
井下落と東京市公園行政の史蹟保存施策
齋藤智志（ETOs 客員研員）
- 地域資源としての江戸域外藩の活用**
高道昌志（東京都立大学／ETOs 客員研員）
江戸史蹟の保存とその課題
一瀬雅富恩馬庭園を素材として—
根崎光男（法政大学名誉教授／ETOs 客員研員）
- > コント**
辻商社（法政大学名誉教授／元日本地学会会長／ETOs 客員研員）
- > 全体討論**

2024年10月19日(土)

13:00 ~ 17:30

参加無料・事前申込制

開催方法

会場及びオンライン(Zoom)によるハイブリッド

会場

法政大学市ヶ谷田町校舎
5F マルチメディアホール
東京都新宿区市谷田町 2-33

参加申込

<https://t.me/apzfz>



問合せ

法政大学江戸東京研究センター
edotokyo-jimu@mhoseai.ac.jp

主催： 法政大学江戸東京研究センター 共催： 法政大学エコ地域デザイン研究所



ETOs
Edo Tokyo Open Space
Ecosystem

シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」ポスター

シンポジウム

「海からみる江戸東京－東京湾の歴史・現在・未来」

開催日：2025 年 1 月 12 日（日）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス ゲート棟

2025年1月12日（日）午前・午後にかけて、シンポジウム「海からみる江戸東京－東京湾の歴史・現在・未来」を開催しました。本シンポジウムは、昨年度開催した「東京湾シンポジウム」の続編となります。対面およびオンラインのハイフレックスで開催し、多数の参加申込者を得ました。

まずは、本センター特任教授の陣内秀信氏による趣旨説明「東京湾シンポジウム－その導入として」から始まりました。東京湾の自然条件、多様な土地利用、佃島・月島・豊洲の造成、埋め立てのプロセスや近代港の計画、物流システムの変遷など、東京湾をめぐる、多岐にわたる論点が述べられます。さらに戦後における開発の進展と自然の喪失1970年代以降の再生の状況、最後にはランドスケープ・アーキテクトであるアドリアン・グーズ氏の論が紹介され、東京湾を群島・多島海として捉えること、「アーキペラゴ」としての可能性が示されました。

つぎに、田中優子氏（センター特任教授）が「松平定信にとつての海」と題した基調講演を行いました。江戸時代のひとつの転換である松平定信（1759－1829）の時代に着目し、定信にとつての「海」がどういう存在なのか、を解き明かしたものです。定信の視点では、外に向かっては、「海」から入ってくる外国を防ぐ「海防」の対象でありました。内に向かっては、「海」の外から隔てられた日本文化を定義づけ、視覚化し、明確にするものであった、そのためには「復古」と「農業振興」が必須であったことが指摘されました。そして「海」との境目であるウォーターフロントにあっては、海水の出入りを感じながら、日本文化を悦楽する場所であったことが述べられました。なかでも、隠居後に築地に作庭した「浴恩園」（現在は埋め立てられている）は、彼の思想と「海」との関係を象徴する存在であったことが紹介され、江戸の庭園の在り方にさらに新たな視点を付け加えたことは、大変興味深いといえます。

つづいて研究報告になります。江戸文芸研究の立場から、小林ふみ子氏（センター兼任研究員）が「江戸前の島をめぐる説話」と題して発表しました。本報告では、江戸時代の石川島と佃島をめぐる様々な由緒・説が紹介されました。石川島

は、旗本石川家に下賜されたことはほぼ史実であるものの、経緯や時代とも異説もあり、将軍家にまつわる「物語」の創造をみることができました。また、佃島においても、摂津佃島から移住した漁民が慶長期に漁業権を得たことはほぼ事実であるものの、その後、コミュニティによる由緒物語の事実化が行われてきたことが指摘されます。このように、江戸前の島々をめぐる説話が、徳川将軍家にまつわるかたちで「創造」されていることが明らかになりました。

お昼休みをはさんで、午後の部の開始となりました。最初に、古川恵太氏（海辺つくり研究会理事長）が「江戸前をつないできた東京湾の流れ」と題して報告を行いました。まず、東京湾内を流れる海流や潮流の特徴を押さえた後に、東京湾の地形の変遷から、アマモ場やノリ養殖場などの干潟の恵み、東京湾に流れ込む河川がつくりだす洲の存在やその埋め立ての変遷、湾内に流れ込む流入水の変化、アサリを中心とした東京湾の生態系が紹介されました。これらを踏まえて、報告の最後には、東京湾岸グリーンベルト構想案が示されました。

つづいて近代文学研究の立場から、中丸宣明氏（センター兼任研究員）は、落語において「江戸前」がどのように語られているのか、をテーマとし、「勝五郎の海－落語「芝浜」考」について報告しました。落語において「海」とは、非日常空間を表現したものであり、非日常性を日常性（世俗性）にひっくり返したものであります。しかし、「芝浜」における噺がそれとは異なることに着目し、三代目・桂三木助の口演記録をもとにその特徴をつぎのように論じました。三木助の「芝浜」は、落語性（滑稽や風刺）を極小化し、人情噺として仕立てており、「芝浜」を徹底的に江戸の物語として仕立てることによって、現実にはあり得ないような成功譚を語り、理想的な夫婦関係を語ることを可能にしたものであると結論付けました。

つぎに人文地理学の立場から、米家志乃布氏（センター長）が「海の地図史と江戸前・東京湾」として、近代における東京湾の地図作成の歴史を軍事的な視点から取り上げました。本発表では、江戸東京の「海」空間の可視化、秘匿や偽装

が、日本の近代的な地図・海図の作成機関である陸地測量部や海軍水路部の測量図整備によって行われたことが示されました。このような東京湾の地図作成の文脈では、とりわけ、関東大震災を画期として、それまでの豊かな干潟や遠浅な海が、経済的・軍事的な要所としての「東京海湾」へと変化し、権力によって空間把握されたことを論じました。

一方、都市史の立場から、高村雅彦氏（センター兼任研究員）が「東京湾を移動する船上生活者」として、権力側の空間把握とは異なる、東京湾に生活する人々の在り方を論じました。戦前までのトウキョウ湾では、多くの船上生活者が存在し、江戸から続く水路網を利用し、水面を自由に行き交っていました。しかし、第二次大戦後、水路は次々に埋め立てられ、船上生活者は水辺から消えていき、彼らが形成していた独特のコミュニティも失われていきました。国や行政が進めた陸の論理が彼らの存在を否定したといえます。そして、本発表は、かつて存在した「生きられた海の空間」としての東京湾を論じることに成功したといえるでしょう。

最後に、建築学とまちづくりの視点から、志村秀明氏（芝浦工業大学建築学部教授）が「佃島、月島の歴史、現在、未来」と題して発表しました。佃島、月島、東京湾岸地域は、江戸東京の発展・近代化・復興を支えてきた地域であり、それぞれの地域がこれらの歴史のなかで様々な個性を育んできました。佃島は、江戸文化を継承してきた貴重な地域でした。しかし、近年の開発の波により、歴史的建造物は取り壊され、かつての地域は変貌しています。そのなかでも、旧飯田家住宅のように、報告者のグループによる取り組みによって保存・活用の成功した事例もあり、今後も、このような活動が続けていく必要性が述べられました。月島は、かつて東京の近代化の象徴地域でもありました。地区内には木造リノベーション店舗として古くからの長屋を活用した場所もあり、地域文化・コミュニティを継承する役割を担っていることが紹介されました。豊洲地区は、戦後の復興のなか、「ビッグドラム」として、都民へのエネルギー供給基地として東京の発展を支えてきました。そして近年では、これらの東京湾岸地域は、都市の再

生緊急整備地域として、再開発の激しい嵐にさらされています。最後に、近年のグローバルな都市論の展開のなかに、東京湾岸地域の在り方を位置づける視点も提示されました。まさに、東京湾の現在から未来の在り方を考えるための報告であったといえるでしょう。

このあとの総合討論では、それぞれの立場からの江戸東京の「海」への視点、東京湾の未来、今後の課題が示され、それぞれの視点が相互に関連し合うことが確認されました。

本シンポジウムでは、江戸東京という都市を、陸の視点からだけでなく、江戸の前に広がる海としての「江戸前」、東京湾という海の視点からも捉えなおし、人々はどのようにこの空間を見、利用して、付き合ってきたか、を問い直しました。その結果、これまでにない、よりダイナミックな海から見た江戸東京について、その歴史、現在、そして未来を考えていく契機になったと思います。本センターが掲げる「文理複眼」による江戸東京研究の大きな成果となる企画となりました。

（米家志乃布）



報告会
「江戸東京研究センター 2024 年度報告会」

開催日：2025 年 2 月 27 日（木）
場所：法政大学 市谷田町校舎 5 階マルチメディアホール

2024年度報告会のプログラムは、4本の研究発表と本センターの三つのメイン・プロジェクトの報告、さらに次年度の全体シンポジウムについての意見交換会で構成されています。まず、高村研究室の佐々木理彩氏から、卒業論文の成果をもとにした「銭湯とまちがおりなすコミュニティー東京北区「稲荷湯」あたり」と題した研究発表が行われました。近代以降、稲荷湯周辺の歴史的な変遷をおさえたあとに、昭和期における人々の柔軟な住みこなしが紹介されました。さらに現在の「溜まり場」をとりあげ、そこでの人々の交流の様子が述べられました。発表の後は、当地域の建築模型を囲んで意見交換し、これからの再開発の波についても話が及びました。次に、山道研究室の熊田英之氏「斜面上の商家群における構えと町並み一恵那市岩村町本通り重要伝統的建造物群保存地区を対象に一」、同研究室の土橋洸太氏「ビルイン商店街における溢れ出しの研究」による報告です。熊田報告は、重要伝統的建造物群保存地区における地形に合わせた商家の構えのパターンを分類し、その特徴を述べました。土橋報告では、ビルのなかにある「溢れ出し」商業空間のパターンを分類し、通路空間の利用としての新しい方向性が提案されました。

最後に、景観研究室の大旗望氏による「江戸名所図会の挿絵描写に着目した江戸の景観構造分析」と題した修士論文の成果が報告されました。江戸名所図会の挿絵に描かれた領域推定と構図分析を行った結果、狭小な空間と広大な空間という特徴が見いだされました。さらに交通の要所における中心領域に注目したところ、宿場町では二段階の景観構造、河川では広大な景観構造であることが述べられました。メイン・プロジェクトの報告では、第1プロジェクト「地理情報システムと名所の景観」（福井恒明教授・米家志乃布教授）では、「東京の史跡」シンポジウムの開催、名所研究の出版にむけての作業経過が報告されました。第2プロジェクト「都市表象史」（小林ふみ子教授・高村雅彦教授）では、「海からみる江戸東京」シンポジウムへの協力、「都市空間と蔦屋重三郎」講演および対談会の予告がありました。第3プロジェク

ト「都市の表象文化と近未来東京のデザイン」（岡村民夫教授・山道拓人准教授）は、映画・アニメ・漫画・文学の東京表象についての研究を続けるとともに、新たに下北沢や成城を中心とした東京郊外の研究を展開することが示されました。「東京の散歩哲学」シンポジウムの開催の予告もありました。最後に、各プロジェクトの成果や個別の研究発表だけでなく、次年度の全体シンポジウムの企画についても意見交換が行われ、新たに4つめのプロジェクトとして、3つのプロジェクト成果を横断するかたちの地図プロジェクトの設置が提案され、了承されました。

報告会終了後には市ヶ谷GRATOで懇親会が行われ、センターの研究員や学生・院生が一緒に楽しいひとときを過ごしました。報告者の皆様には、素晴らしい研究成果を披露していただき、大変有意義な会になりました。心より感謝申し上げます。

（米家志乃布）

講義
「フィールドワーク」

江戸東京研究センターにあって、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングはもっとも重要な活動となる。デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク（建築）」を設けている。学生たちが主体的に東京の街に出て、面白そうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図や様々な史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図、模型製作を行う。こうした作業を通じて、たんに分析方法や実測の知識を身につけるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。

（高村雅彦）



ハッピーロード大山路地裏



近藤紙工

講義
「都市解読方法特論―東京発掘プロジェクト 水辺編」

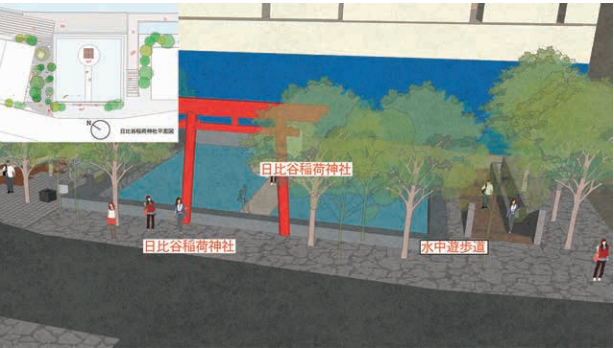
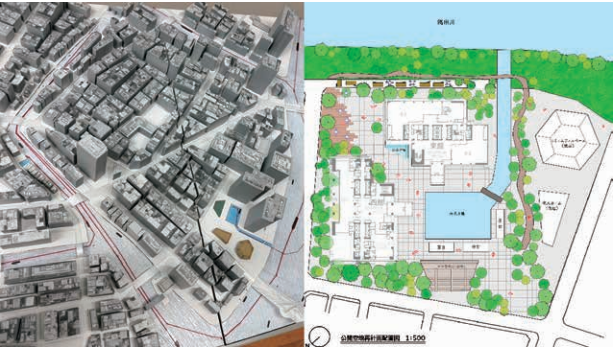
■東京発掘プロジェクト2024概要
東京の地下には歴史的遺構が数多く眠っている。そうした遺構を仮想的に掘り起こし、現代都市の中に位置づけ、再定義によって都市の将来像を模索する野心的な試みを「東京発掘プロジェクト」と称して6年間の活動が続けている。遺構とは江戸城の歴史的遺構はもちろんのこと、近代になってから埋められた運河や水路なども含んでいる。2024年度は「東京水辺再生プロジェクト」と題して、東京の水辺および公共空間で、社会的な課題となっている事項について、分野横断的な研究と具体的提案を行った。社会的な課題として研究者たちに提案を求めたテーマは次の3点であった。ひとつ目は「亀島川の水辺再生」、二つ目は「水辺に近い公開空地の活用促進」、そして三つ目が「水による谷根千の防災性向上」であった。

■3つの研究テーマについて
「亀島川の水辺再生」とは、水門に守られているため親水性の高い護岸整備が成されているにも関わらず、利活用が進んでいない現状を打破するための具体的提言を行うものである。江戸湊として舟運の拠点として賑わった亀島川とその周辺を、ふたたび「水の都」を想起させるような課題解決型アイデア提案を試みた。
「水辺に近い公開空地の利用促進」では、高度成長期に建設された公開空地の中で、都市の活性化に活かされていない事例を抽出し、水辺の利活用とセットで具体的提案を試みるものだった。公開空地の中には人が寄り付かず治安上の問題を抱える事例も少なくない。また都内の水辺は、にぎわい創出の観点に乏しく、防災船着場が設置されても日常利用が成されず、緊急時に利用できるかはなはだ疑問である。そうした課題に対して、二つの事項をマッチングさせることで解決策を模索する試みだった。
さいごの「水による谷根千の防災性向上」は、木造住宅が密集する谷中・根津・千駄木の火災被害を軽減させるための措置として、目に見える場所に「水」を用意する提案である。このエリアにはかつて藍染川という都市河川が流れていたが、現在は暗渠化され地上で水の流れを見ることはできない。藍染川の流れを復活させることで、初期消火に役立てるとともに、公開空地の乏しい谷根千に人が佇める水辺空間を用意することを提案した。

■まとめ

いずれのテーマも、過去を知り現状の課題を把握したうえで、近未来の道筋を示す実践的な研究であった。都市の記憶を創造へつなげる取組みとして、さらなる深度化を模索したい。

(皆川典久)



「霊巖島とそれを取り巻く水辺について」の提案より抜粋



「谷中・藍染川再生プロジェクト」の提案より抜粋

講義

「人文地理学セミナーA／B」

江戸東京研究センターでは、教員による研究活動だけでなく、学生・院生などの若手育成も重要な教育研究活動のひとつとなります。米家担当のILAC総合科目では、学部2年生以上の履修科目として、「人文地理学セミナーA/B」を開講しています。この授業では、「東京の街歩きコースを提案しよう!」と題し、受講生のグループが、街の案内者になったつもりで、東京の「街歩き」コースを他の受講生や教員に提案します。それを踏まえて、江戸東京という地域の見方、考え方についてみんなで議論します。東京には、多様な自然・歴史・文化をもつ様々な街がたくさんあります。受講生は、実際に「街歩き」コースを提案するために、事前に情報収集し、コースをつくり、パワーポイントで発表します。これらの作業過程で、東京の街に対する多くの発見や気づきがあります。大学での地理学を学ぶ楽しさを経験し、教養としての地理学はもちろん、今後の専門学習にも活かしていくことを目標としています。

(米家志乃布)



EToS 監修・協力講座

『【1年で学ぶ教養】新・江戸東京研究』

開催日：以下のとおり(月1回、1年間)

主催・会場：NHK 文化センター青山教室 (有料講座)

江戸を下敷きとする東京の都市は、世界の中でも非常に特徴があります。独自の歴史に裏打ちされた東京についてより深く認識するためのNHK文化センター青山教室主催の一年間の講座に、江戸東京研究センターに所属する都市建築学、文学、美術史、地理学など様々な分野の所員が講師として登壇しました。

2024/04/26(金)

海の側から水都東京を再考する(陣内秀信)

2024/05/24(金)

戦後の東京が排除したもの 水上居住と露店収容(高村雅彦)

2024/06/14(金)

「東京エコヒストリー」水都江戸東京の成立背景(神谷博)

2024/07/12(金)

現代に受け継がれた大名庭園・イタリア大使館を中心に(畠山望美)

2024/08/23(金)

時代とともに「東京」はどのように歌われてきたのか?(増淵敏之)

2024/09/13(金)

江戸を描く 蕙斎VS北斎(小林ふみ子)

2024/10/25(金)

凹凸地形と水が育んだ江戸東京、そして世界一の観光都市へ(皆川典久)

2024/11/08(金)

大江戸トイレ事情(根崎光男)

2024/12/13(金)

外国人監督による東京の表象 東京画からPERFECT DAYSまで(岡村民夫)

2025/01/10(金)

薦屋重三郎の編集(田中優子)

2025/02/28(金)

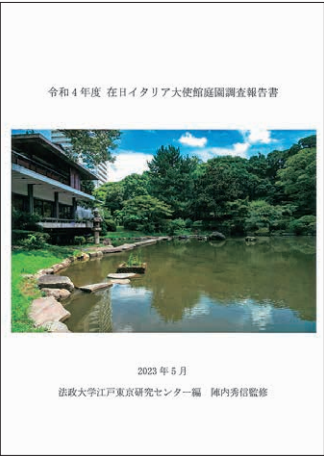
江戸の痕跡 銭湯の今(栗生はるか)

2025/03/28(金)

銅像がつくるモダン名所(米家志乃布)

EToS報告書

令和4年度 在日イタリア大使館庭園調査報告書



監修:陣内秀信
発行:法政大学 江戸東京研究センター
発行年月:2023年5月

ご挨拶	1
はじめに	5
巻頭資料	9
資料1 『江戸三田御中屋敷絵図』	
資料2 在日イタリア大使館『配置計画図』	
資料3 イタリア大使館庭園測量平面図	
資料4 恵露閣復元3Dモデル	
目次・例言	16
第Ⅰ章 本研究の概要	18
1. 位置と環境	
2. 所有者の変遷と街区の形成	
3. Pier Francesco Borghese (1928-2018). Landscape architect in Tokyo	
第Ⅱ章 歴史調査と成果	34
1. 江戸期:伊予松平隠岐守中屋敷の時代	
2. 明治・大正期:松方正義本邸の時代	
3. 昭和期以降:イタリア大使館の時代	
第Ⅲ章 水環境調査と成果	58
1. 地形地質	
2. 水系及び水源	
3. 雨水循環システム	
4. 生物生態	
第Ⅳ章 庭園の実測調査と成果	87
1. 測量による庭園の三次元情報の取得	
2. 庭園の樹木等の調査	
3. 石材・石造物調査	
4. 池泉の護岸形態とその損傷状況	
第Ⅴ章 今後に向けて	112
1. イタリア大使館庭園の本質的価値	
2. 庭園修理・管理に向けた課題	
3. 和船プロジェクトに関する報告	
おわりに	134

東京発掘プロジェクト 2023 千代田レジェンド・リノベーション



監修:皆川典久
発行:法政大学 江戸東京研究センター
発行年月:2024年3月

「千代田レジェンド・リノベーション」とは？	皆川典久
1. 溜池の再生	福田美里 藤本葉月 小瀬木駿 徐志敏 城島杏友 白井萌々子 WANG JIAYU CHEN LANGCONG LEE HYEONSEOP 山田明子 張耀芸 蔣睿
2. 水道の更新ー溜池山王・赤坂見附	
3. 鎌倉川岸における遊楽空間の再生	
4. 水辺空間ー交通・交流の節点	
5. 総武中央ボートライン構想	
6. 道三堀の復興	

著書・論文・学会発表・作品・その他

著書

書名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
著者名:Shinobu Komeie (分担執筆)
標題:Mapping Tokyo :Cartography and the Representation of the Capital of Japan from the Nineteenth the Twentieth Centuries
発行:Cambridge Scholars Publishing
発行年月:2023年12月

書名:大江戸トイレ事情 (同成社江戸時代史叢書36)
著者名:根崎光男
発行:同成社
発行年月:2024年1月

書名:言葉は選ぶためにある 江戸から見ると
著者名:田中優子
発行:青土社
発行年月:2024年2月

書名:"Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi ed.by Laura Moretti +Sato Yukiko"
著者名:Fumiko Kobayashi
標題:Generative Interactions :The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e
発行:Brill
発行年月:2024年2月

書名:明清文学論集 その楽しさ その広がり
著者名:小林ふみ子
標題:大田南畝の狂詩と明詩
発行:東方書店
発行年月:2024年3月

書名:江戸東京移行期論 (共著)
著者名:松本剣志郎 (大石学、落合功編)
標題:明治初期東京の公共負担
発行:戎光祥出版
発行年月:2024年3月

書名:南イタリアのテリトリーー農業が社会を変える
著者名:木村純子・陣内秀信編著
発行:白桃書房
発行年月:2024年3月

書名:「川の字」文化の深層心理学
著者名:北山修、田中優子その他
標題:江戸文化にみる「川の字」文化
発行:岩波書店
発行年月:2024年4月

書名:ふたしかさを生きる道具
著者名:ツバメアーキテクト(山道拓人・千葉元生・西川日満里)
発行:TOTO出版

発行年月:2024年4月

書名:ロシア極東・シベリアを知るための70章
著者名:米家志乃布 (分担執筆)
標題:シベリアの地域情報収集と地図化、ロシアの近代学術調査と探検
発行:明石書店
発行年月:2024年5月

書名:建築をつくるとは、自ら手を動かす12人の仕事
著者名:河野直、権藤智之編著、栗生はるか他 (共著)
標題:銭湯とまちの生態系を編み直す
発行:学芸出版社
発行年月:2024年5月

書名:レスコビッチコレクションの摺物ーパリから来た北斎・広重・北溪・岳亭ー (展覧会図録)
著者名:小林ふみ子
標題:狂歌連中、摺物をつくる
発行:大和文華館
発行年月:2024年7月

書名:水都東京エコヒストリーーヒトと水都のサバイバルー
著者名:神谷博
発行:マルモ出版
発行年月:2024年7月

書名:大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす (2014年岩波書店刊の改訂、文庫化。あらたに解説を付した)
著者名:小林ふみ子
発行:KADOKAWA
発行年月:2024年9月

書名:宗教・カルト・法 ー旧統一協会問題と日本社会
著者名:田中優子、島蘭進、若松英輔、釈徹宗その他
発行:高文研
発行年月:2024年10月

書名:薦屋重三郎 江戸を編集した男
著者名:田中優子
発行:文藝春秋
発行年月:2024年10月

書名:昭和問答
著者名:田中優子、松岡正剛
発行:岩波書店
発行年月:2024年10月

書名:温泉文学史序説 夏目漱石、川端康成、宮沢賢治、モーパッサン
著者名:岡村民夫
発行:水声社
発行年月:2024年10月30日

書名:鷹 (ものと人間の文化史191)
著者名:根崎光男
発行:法政大学出版局

発行年月：2024年12月

書名：アマルフィ海岸のテリトリーオー大地と結ばれた海洋都市群の空間構成
著者名：陣内秀信、稲益祐太編著
発行：鹿島出版会
発行年月：2025年1月

査読付論文

論文標題：江戸大名庭園における滝と上水の関係性
著者名：内藤啓太
雑誌名：日本建築学会計画系論文集 第89巻 第816号、pp.433-444
発行年月：2024年2月

論文標題：近世随筆における考証の意義
著者名：小林ふみ子
雑誌名：国語と国文学 令和7年2月号
発行年月：2025年2月

論文標題：三島通陽と千駄ヶ谷青年団 大正デモクラシーと華族をめぐる一考察として
著者名：内藤一成
雑誌名：法政史学 第101号
発行年月：2024年3月

論文標題：懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎
著者名：小林ふみ子
雑誌名：国華 第1542号
発行年月：2024年4月

論文標題：用語および図表から見るMSW（Mapping for a Sustainable World）翻訳版の特徴
著者名：森田喬
雑誌名：地図
発行年月：2024年6月

論文標題：学歴貴族の虚実 一三島弥彦・石坂泰三、それぞれの1908年日記を手がかりに―
著者名：内藤一成
雑誌名：法政史学 第102号
発行年月：2024年12月

論文

論文標題：石牟礼道子・志村ふくみ共作の『沖宮』
著者名：田中優子
雑誌名：別冊太陽・志村ふくみ
発行年月：2024年2月

論文標題：吉原という「別世」
著者名：田中優子
書名：大吉原展図録（東京藝術大学）

発行年月：2024年3月

論文標題：吉原文化と女性の人権
著者名：田中優子
雑誌名：東京新聞
発行年月：2024年3月

論文標題：木版画にみる東京の風景―Visual Artの都市地理学
著者名：米家志乃布
雑誌名：法政大学文学部紀要88
発行年月：2024年3月

論文標題：関東大震災と東京の復興―建築・景観・思想・コミュニティー
著者名：陣内秀信
雑誌名：『法政地理』第56号、pp.5-18.
発行年月：2024年3月

論文標題：故郷喪失から新たな故郷へ 芥川龍之介、堀辰雄、立原道造
著者名：岡村民夫
雑誌名：法政地理56号
発行年月：2024年3月20日

論文標題：宮沢賢治と活動写真の時代
著者名：岡村民夫
雑誌名：賢治研究152号
発行年月：2024年3月31日

論文標題：成熟社会の都市、地域、国土
著者名：陣内秀信
雑誌名：『アステイオン』100号、pp.186-191.
発行年月：2024年6月

論文標題：自然の力を受け流し、水とともに生きる アジアの水辺都市
著者名：高村雅彦
雑誌名：日事連2024年9月号
発行年月：2024年9月

論文標題：Edo Castle Mission―日伊国際共同研究による江戸城CG復元プロジェクト
著者名：高村雅彦
雑誌名：公益財団法人鹿島学術振興財団2023年度年報
発行年月：2024年10月31日

論文標題：薦屋重三郎が編集した吉原
著者名：田中優子
雑誌名：別冊太陽「薦屋重三郎」
発行年月：2024年11月

論文標題：薦屋重三郎のネットワーク
著者名：田中優子
雑誌名：別冊太陽「薦屋重三郎」
発行年月：2024年11月

論文標題：郡上八幡における水利用施設群の管理・利用実態に関する研究
著者名：川上健太、福井恒明

雑誌名：第70回土木計画学研究・講演集
発行年月：2024年11月

論文標題：農地の宅地化による水害リスクへの影響分析―千曲市杭瀬下地区を対象として―
著者名：横江玲奈、岡田一天、福井恒明
雑誌名：第70回土木計画学研究・講演集
発行年月：2024年11月

論文標題：港町の発展・整備に伴う街路構造変遷に関する研究
著者名：岩田健吾、福井恒明
雑誌名：第70回土木計画学研究・講演集
発行年月：2024年11月

学会発表（招待講演・国際学会）

発表表題：”Communities of commoner communication in the Edo Period”
発表者名：Yuko Tanaka
学会等名：International Conference “Public and private spaces in Tokyo and Venice: The rôle of local communities and values”
発表場所：Ca’ Foscari University of Venice
発表年月：2024年1月11～13日

発表標題：Playing with the Classics: The Esprit of Kyōka Surimono
発表者名：Fumiko Kobayashi
学会等名：Annual Conference, Association for Asian Studies
発表場所：Seattle,USA
発表年月：2024年3月

発表標題：『異国物語』の戯作化 『画本国見山』をめぐるって
発表者名：小林ふみ子
学会等名：第19回間文化研究会
発表場所：京都大学文学部
発表年月：2024年3月

発表標題：Revisiting ‘kōshō zuihitsu’ from the view point of Ōta Nanpo
発表者名：Fumiko Kobayashi
学会等名：Essays “Following the Brush” (zuihitsu) project meeting, Centre de recherche sur les civilisations de l’Asie orientale
発表場所：College de France
発表年月：2024年6月

発表標題：主題図を考える
発表者名：森田喬
学会等名：日本地図学会総会特別講演
発表場所：日本大学経済学部（水道橋）
発表年月：2024年6月1日

発表表題：The Tokyo landscape in woodblock prints:Urban geography in visual art

発表者名：Komeie Shinobu
学会等名：国際地理学会議（IGC）
発表場所：ダブリン市立大学
発表年月：2024年8月

発表標題：Orientalizing Ryukyu in Nineteenth-Century Japan
発表者名：Fumiko Kobayashi
学会等名：the 13th International Convension of Asia Scholars
発表場所：Surabaya university, Indonesia
発表年月：2024年8月

発表標題：吉原の文化をどう考えるか
発表者名：田中優子
学会等名：イタリア日本研究学会（AISTUGIA）
発表場所：ベルガモ大学（イタリア）
発表年月：2024年9月

発表標題：A new life for traditional public bath and their multiple heritage values
発表者名：Mauro VOLPIANO、Andrea BOCCO、陣内秀信、栗生はるか他
学会等名：International Conference on Heritage-led development,sharing visions between Italy and Japan
発表場所：京都信用金庫
発表年月：2024年9月

発表標題：自分らしさがひらくこれからの社会―シュリンクするまちにおける共助と個人を考える
発表者名：栗生はるか、時岡壮太、矢田明子
学会等名：日本建築学会
発表場所：建築会館ホール
発表年月：2024年10月

発表標題：銭湯で人をつなぐ活動
発表者名：栗生はるか
学会等名：IA建築家大会 2024別府
発表場所：オンライン
発表年月：2024年10月

発表標題：Connecting pictures of mountains-and-water and pictures of birds-and-flowers: The popularization of Chinese literati culture in early nineteenth-century Japan
発表者名：Fumiko Kobayashi
学会等名：Ecocritical Perspectives in East Asian Art and Culture
発表場所：Leiden university, the Netherlands
発表年月：2024年10月

発表標題：循環する言葉とものと文化
発表者名：田中優子
学会等名：「都市化＝近代化」というアボリアをどう乗り越えるか
発表場所：神奈川大学
発表年月：2024年11月

発表標題：赤松小三郎から見た江戸時代
発表者名：田中優子

学会等名:赤松小三郎研究会
発表場所:東京
発表年月:2024年11月

発表標題:すまいと儀礼のいま
発表者名:岡本亮輔、宮内貴久、栗生はるか
学会等名:住総研 すまいろんシンポジウム
発表場所:オンライン
発表年月:2024年11月

発表標題:Various techniques of gesaku :Analysing texts and images in Santō Kyōden’s E-kyōdai
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:Rire et littérature en Chine et au Japon, Centre de recherche sur les civilisations de l’Asie orientale
発表場所:Université Paris Cité
発表年月:2024年11月

発表標題:大江宏の庭園観
発表者名:内藤啓太、大江新
学会等名:令和6年度三番町共用会議所一般公開トークイベント
発表場所:三番町共用会議所
発表年月:2024年12月

発表標題:栄之と南畝、本気の画賛
発表者名:小林ふみ子
学会等名:名古屋大学国語国文学会
発表場所:名古屋大学東山キャンパス
発表年月:2024年12月

学会発表

発表標題:Sakariba (amusementquarters) and station-front shopping streets as Japanese-style public spaces
発表者名:Hidenobu JINNAI
学会等名:International Conference“Public and private spaces in Tokyo and Venice: The rôle of local communities and values”
発表場所:Foscari University of Venice
発表年月:2024年1月11－13日

発表標題:水上住居と露店収容 戦後の東京で公共空間から消された特殊なコミュニティ
発表者名:高村雅彦
学会等名:International Conference“Public and private spaces in Tokyo and Venice: The rôle of local communities and values”
発表場所:イタリア・ヴェネツィア
発表年月:2024年1月12日

発表標題:Anime Pilgrimage and Représentations of Tokyo in Japanese Animation
発表者名:岡村民夫
学会等名:International Conference“Public and private spaces in Tokyo and Venice: The rôle of local communities and values”
発表場所:”Center for Comparative International Studies

Ca’Foscari University of Venice”
発表年月:2024年1月12日

発表標題:学歴貴族の虚実 一三島弥彦・石坂泰三、それぞれの1908年日記を手がかりに一
発表者名:内藤一成
学会等名:2024年度法政大学史学会大会
発表場所:法政史学
発表年月:2024年6月1日

発表標題:主題図を考える
発表者名:森田喬
学会等名:日本地図学会総会特別講演
発表場所:日本大学経済学部(水道橋)
発表年月:2024年6月1日

発表標題:玉川上水の船溜と水車が果たす東京の近代化
発表者名:高村雅彦、照沼和佳奈、中釜英里香
学会等名:水都江戸東京シンポジウム「水都東京の近未来を考える」～テリトリーオの視点から～
発表場所:法政大学
発表年月:2024年7月25日

発表標題:The application of the concept of“territorio”to the Japanese context
発表者名:Hidenobu JINNAI
学会等名:International Conference of Heritage-led development, sharing visions between Italy and Japan 10-11th September, 2024.
発表場所:PoliTo Japan Hub and Kobe Design University, Kyoto.
発表年月:2024年9月11日

発表標題:河井弥八と文化財保護行政
発表者名:内藤一成
学会等名:法政大学江戸東京研究センター「地理情報システムと名所の景観」プロジェクト シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」
発表場所:法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール
発表年月:2024年10月19日

発表標題:井下清と東京市公園行政の史蹟保存施策
発表者名:齋藤智志
学会等名:法政大学江戸東京研究センター「地理情報システムと名所の景観」プロジェクト シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」
発表場所:法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール
発表年月:2024年10月19日

発表標題:江戸史蹟の保存とその課題
発表者名:根崎光男
学会等名:法政大学江戸東京研究センター「地理情報システムと名所の景観」プロジェクト シンポジウム「江戸東京の史跡と都市空間」
発表場所:法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール
発表年月:2024年10月19日

発表標題:故郷喪失から新たな故郷へ 芥川龍之介、堀辰雄、立原道造
発表者名:岡村民夫

学会等名:シンポジウム:関東大震災100年 大震災と都市空間～過去に学び、近未来を描く」法政大学地理学会
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2023年10月21日

発表標題:雨庭普及のための技術的検討(その2)～東京都世田谷区における展開～
発表者名:神谷博
学会名等:雨水資源化システム学会
発表場所:日本大学 文理学部キャンパス8号館
発表年月:2024年11月

発表標題:イタリアにおける風景論一都市からテリトリーオへ
発表者名:陣内秀信
学会等名:文化的景観研究集会(第12回)
発表場所:奈良文化財研究所
発表年月:2024年11月16日

発表標題:古式の再現一端緒を開く初作の思惟一
発表者名:高村雅彦
学会等名:梅若能楽学院実測報告会
発表場所:三番町共用会議室
発表年月:2024年11月30日

発表標題:名所絵にみる江戸の周縁部に対する空間認識
発表者名:大簇望、福井恒明
学会等名:第20回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:北海道大学
発表年月:2024年12月

発表標題:まちづくり活動における「まちの歴史」の認識と活動への展開
発表者名:福岡美智、佐瀬優子、福井恒明
学会等名:第20回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:北海道大学
発表年月:2024年12月

発表標題:重要文化的景観選定範囲内の無堤地区におけるかわ・まちづくりデザイン 一山形県大江町百目木地区を対象として一
発表者名:鴨潤矢、福井恒明
学会等名:第20回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:北海道大学
発表年月:2024年12月

発表標題:『区民の声』にみる公共空間に対する市民および行政の意識に関する研究
発表者名:辻玉実、荻原知子、福井恒明
学会等名:第20回景観・デザイン研究発表会
発表場所:北海道大学
発表年月:2024年12月

発表標題:「散歩の達人」にみる散歩の楽しみとしてのまちの構成要素に関する分析
発表者名:中村仁哉、佐瀬優子、福井恒明
学会等名:第20回景観・デザイン研究発表会
発表場所:北海道大学

発表年月:2024年12月

作品

作品名:建築作品 分岐の家
設計者名:ツバメアーキテクツ(山道拓人・千葉元生・西川日満里)
雑誌名:新建築住宅特集2025年1月号
発表日:2024年12月

その他

標題:時代を読む
発表者:田中優子
発表場所:東京新聞
発表年月:2021年8月～月連載

標題:稲荷湯長屋
著者名:せんとうとまち(栗生はるか)+YUAN ARCHITECTS
雑誌名:新建築
発表日:2023年9月

標題:今日の視角
著者名:田中優子
雑誌名:信濃毎日新聞
発行年月:2023年10月～週連載

標題:大江戸残照トリップ
著者名:田中優子
雑誌名:東京新聞
発行年月:2024年1月～月連載

標題:シンポジウム「没後二百年 大田南畝を語る」報告
著者名:久保田啓一、宮崎修多、福田安典、宮内淳子、小林ふみ子、宮本祐規子
雑誌名:近世文藝 第119号
発行年月:2024年1月

標題:中国江南の蘇州と水郷鎮
発表者名:高村雅彦
学会等名:かわさき市民アカデミー
発表場所:新百合21ビル
発表年月:2024年2月6日

標題:野川での取り組み～これまでの50年とこれから～
発表者名:神谷博
学会名等:白子川講演会
発表場所:白子川源流・水辺の会
発表年月:2024年3月

標題:中世武蔵国絵図から武蔵の地誌を学ぶ
発表者名:神谷博
学会名等:三鷹ネットワーク大学連続講座1
発表場所:三鷹ネットワーク大学

発表年月：2024年3月9日	発表標題：湯沢で受け継がれる小住宅 発表者名：石渡雄士 雑誌名：建築ジャーナル2024年8月号 白井晟一再発見、pp.30-31 発表年月：2024年8月	発表標題：市内にある景観資源を巡ってみよう！名水に恵まれた新屋とそこに 住む人々の暮らし 発表者名：石渡雄士 学会等名：秋田市都市整備部都市計画課 発表場所：秋田公立美術大学 発表年月：2024年10月25日	著者名：岡村民夫 雑誌名：第16回フランコフォニーを発見しよう！ 発行：日本におけるフランコフォニー推進評議会、日本フランス語教育学会 発行年月：2024年12月7日
標題：武蔵国の国府『水都府中』を歩く 発表者名：神谷博 学会名等：三鷹ネットワーク大学連続講座2 発表場所：三鷹ネットワーク大学 発表年月：2024年3月16日	標題：神宮前のヴォイドインフラ 著者名：北山恒+awn 雑誌名：新建築 発行：新建築社 発表年月：2024年8月	標題：三番町共用会議所別館〈聞き取り〉建物の運用・管理の過程とこれか ら 著者名：大江新、石井翔大、内藤啓太ほか 雑誌名：建築ジャーナル 2024年11月号 No.1361、pp.20-21 発行年月：2024年11月	標題：外国人監督における東京の表象 発表者名：岡村民夫 講座名：新・江戸東京研究 発表場所：NHK文化センター青山教室 発表年月：2024年12月13日
標題：水都府中の水系構造と武蔵野の景観 発表者名：神谷博 学会名等：三鷹ネットワーク大学連続講座3 発表場所：三鷹ネットワーク大学 発表年月：2024年3月23日	標題：日本建築学会大会 記念行事 見学会 ナビゲーター：宇野求、八木乾二、栗生はるか他 企画名：人や暮らしがつくる街の魅力を探る 開催年月：2024年9月	標題：大田南畝 文芸の世界を闊歩した「知の巨星」 著者名：小林ふみ子 雑誌名：NHK大河ドラマ 歴史ハンドブック「べらぼう〜薦重栄華乃夢嘶〜 薦屋重三郎とその時代」 発行年月：2024年11月	標題：丘上都市と田園からなるオルチャ溪谷のテリトリーオ 著者名：陣内秀信 雑誌名：しあわせ気分のイタリア語、pp.74-74. 発行：NHK出版 発行年月：2025年1月
標題：宮沢賢治 心象スケッチからイーハトーブの装景へ 著者名：岡村民夫 雑誌名：宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報68号 発行年月：2024年3月31日	標題：都市ローマでの古代との対話（青柳正規『皇帝たちの都ローマ』の解 説） 著者名：陣内秀信 発行：ちくま学芸文庫、pp.433-448. 発行年月：2024年9月	標題：洞窟都市の住宅タイプから発展を読む 著者名：陣内秀信 雑誌名：しあわせ気分のイタリア語、pp.74-74. 発行：NHK出版 発行年月：2024年11月	標題：公共土木事業と文化的景観 著者名：福井恒明 雑誌名：月刊文化財 発行年月：2025年1月
標題：戦後の東京が排除したものの一水上居住と露店収容 発表者名：高村雅彦 学会等名：NHK文化センター講座 発表場所：NHK青山文化センター 発表年月：2024年5月24日	発表標題：秋田市における中山間地域の歴史と空間構造 発表者名：石渡雄士 学会等名：トークイベント「秋田から考える 農村/都市/景観」 発表場所：カレッジプラザ 発表年月：2024年9月21日	標題：地下に潜むギリシャ起源都市 ナポリを訪ねる 著者名：陣内秀信 雑誌名：しあわせ気分のイタリア語、pp.74-74. 発行：NHK出版 発行年月：2024年11月	
標題：2024年度日本建築学会著作賞 受賞者名：陣内秀信 著書名：『トスカーナ・オルチャ溪谷のテリトリーオー都市と田園の風景を読 む』古小烏舎、2022年によって 受賞年月：2024年5月30日	標題：日本建築学会 建築文化考2024：特別展示 出展者名：栗生はるか、時岡壮太、矢田明子 企画名：”自分らしさがひらくこれからの社会 登壇者がつむぐ小さな物語” 発行年月：2024年10月	標題：公共施設から始めるグリーンインフラの導入意義 発表者名：神谷博 学会名等：気候変動対策支援事業「第4回意見交換会（見学会）」 発表場所：公益財団法人 東京市町村自治調査会 オール東京62市区町村 共同事業「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」 発表年月：2024年11月7日	
雑誌名：建築知識24/07 新石器・古代王朝から清朝まで 中国の建物と街 並み詳説絵巻 著者名：高村雅彦監修 発行：エクスナレッジ 発行年月：2024年6月	標題：狂騒と儉約 薦重が生きた二つの時代の空気 著者名：小林ふみ子 雑誌名：別冊太陽薦屋重三郎 時代を変えた江戸の本屋 発表年月：2024年10月	標題：千島・樺太の地図出版史一日露比較研究 著者名：米家志乃布 雑誌名：国土地理協会研究助成報告 発行年月：2024年12月	
標題：東京エコヒストリー ～水都江戸東京の成立背景について～ 発表者名：神谷博 学会名等：2024年度「新・江戸東京研究講座」 発表場所：NHK文化センター 発表年月：2024年6月14日	標題：水上の迷宮都市ヴェネツィアを読む 著者名：陣内秀信 雑誌名：しあわせ気分のイタリア語、pp.74-74. 発行：NHK出版 発行年月：2024年10月	標題：狂歌がつくる磁場 吉原の場合 著者名：小林ふみ子 媒体名：東京人 台東区で旅する 薦屋重三郎と江戸文化 発行年月：2024年12月	
発表標題：建築デザインを学び、実際に見て歩こう（西洋の建築様式と秋田の 近代建築を中心に） 発表者名：石渡雄士 学会等名：大学コンソーシアムあきた令和5年度前期高大連携授業 発表場所：カレッジプラザ 発表年月：2024年7月6日	標題：グリーンインフラまちづくりと雨庭の展開 発表者名：神谷博 学会名等：第33回河川講習会 発表場所：（一社）建設コンサルタンツ協会 発表年月：2024年10月	作品名：稲荷湯修復再生プロジェクト 受賞者名：一般社団法人せんとうとまち（栗生はるか、サム・ホールデン、三文 字昌也他） 賞・媒体名：ユネスコ アジア太平洋文化遺産保全賞 最優秀賞 発表日：2024年12月6日	
発表標題：キャンパスにある旧国立農業倉庫を知る 発表者名：石渡雄士 学会等名：秋田公立美術大学夏のオープンキャンパス2024 発表場所：秋田公立美術大学 発表年月：2024年7月27日	標題：グリーンインフラの最新動向 発表者名：神谷博 学会名等：公開講座国分寺のグリーンインフラとまちづくり 発表場所：国分寺名水と歴史的景観を守る会 発表年月：2024年10月	標題：ボール・グリモー 高畑勲・宮崎駿をアニメーション監督にさせた男	

*2025 年 3 月現在

江戸東京研究センター長			稲益 祐太 (イナマス ユウタ)	東海大学工学部建築学科准教授、法政大学デザイン工学部兼任講師、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
米家 志乃布 (コメイエ シノブ)	教授	文学部地理学科	犬塚 悠 (イヌツカ ユウ)	名古屋工業大学大学院工学研究科准教授
研究プロジェクト・リーダー			Olimpia Niglio (オリヰ アーニョ)	イタリア バヴィア大学工学部土木・建築学科教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
地理情報システムと名所の景観				
米家 志乃布 (コメイエ シノブ)	教授	文学部地理学科	CAROLI Rosa (カーロリ ローザ)	ヴェネツィア カ・フォスカリ大学言語学・比較文化研究学科教授
福井 恒明 (フクイ ツネアキ)	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科	香月 歩 (カツキ アユミ)	東京工業大学助教
			金谷 匡高 (カナヤ マサタカ)	世田谷区教育委員会学芸員、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
都市表象史			神谷 博 (カミヤ ヒロシ)	特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート理事長、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
高村 雅彦 (タカムラ マサヒコ)	教授	デザイン工学部建築学科		
小林 ふみ子 (コバヤシ フミコ)	教授	文学部日本文学科		
			川添 裕 (カワゾエ ユウ)	横浜国立大学名誉教授
表象文化と近未来デザイン			川田 順造 (カワダ ジュンゾウ)	神奈川大学特別招聘教授
岡村 民夫 (オカムラ タミオ)	教授	国際文化学部国際文化学科	北山 恒 (キタヤマ コウ)	有限会社awn CEO、法政大学デザイン工学部名誉フェロー、横浜国立大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
山道 拓人 (サンドウ タクト)	准教授	デザイン工学部建築学科		
特任研究員 (五十音順)			栗生 はるか (クリユウ ハルカ)	一般社団法人せんととうまち代表理事
			河野 哲也 (コウノ テツヤ)	立教大学文学部教育学科教授
陣内 秀信 (ジンナイ ヒデノブ)	特任教授	法政大学特任教授	齋藤 智志 (サイトウ サトシ)	秋山庄太郎写真美術館 主任学芸員
田中 優子 (タナカ ユウコ)	特任教授	法政大学特任教授	佐竹 雄太 (サタケ ユウタ)	株式会社アラウンドアーキテクチャー代表取締役
			白石 さや (シライシ サヤ)	東京大学名誉教授 (東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員)
兼任研究員 (五十音順)			Giorgio Luigi RISSO (ジョルジョ・ルイジ・リッソ)	Director、Top Manager、Unione Comuni Di Moncalieri, Trofarello、La Loggia (モンカリエーリ、トロファレッロ、ラ・ロッジア自治体連合／理事長・マネージャー)
赤松 佳珠子 (アカマツ カズコ)	教授	デザイン工学部建築学科		
岩佐 明彦 (イワサ アキヒコ)	教授	デザイン工学部建築学科		
大塚 紀弘 (オオツカ ノリヒロ)	准教授	文学部史学科		
小口 雅史 (オグチ マサシ)	教授	文学部史学科	鈴木 裕輔 (スズムラ ユウスケ)	名城大学外国語学部准教授
衣笠 正晃 (キヌガサ マサアキ)	教授	国際文化学部国際文化学科	高道 昌志 (タカミチ マサシ)	東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
			根崎 光男 (ネサキ ミツオ)	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
下吹越 武人 (シモヒゴシ タクト)	教授	デザイン工学部建築学科		
高田 圭 (タカタ ケイ)	准教授	国際日本学研究所	星野 勉 (ホシノ ツトム)	法政大学名誉教授、国際日本学研究所客員所員
高見 公雄 (タカミ キミオ)	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科	皆川 典久 (ミナガワ ノリヒサ)	東京スリパチ学会会長、鹿島建設株式会社
内藤 一成 (ナイトウ カズナリ)	准教授	文学部史学科	森田 喬 (モリタ タカシ)	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
内藤 啓太 (ナイトウ ケイタ)	教務助手	デザイン工学部建築学科	森中 康彰 (モリナカ ヤスアキ)	一級建築士事務所 小坂森中建築 代表
中丸 宣明 (ナカマル ノブアキ)	教授	文学部日本文学科	山崎 修平 (ヤマザキ シュウヘイ)	詩人・作家・文芸評論家、「イリュミナション」代表
増淵 敏之 (マスブチ トシユキ)	教授	大学院政策創造研究科		
松本 剣志郎 (マツモト ケンシロウ)	准教授	文学部史学科	山本 真鳥 (ヤマモト マトリ)	法政大学名誉教授
横山 泰子 (ヨコヤマ ヤスコ)	教授	理工学部創生科学科	渡邊 眞理 (ワタナベ マコト)	法政大学名誉教授
客員研究員 (五十音順)				
安孫子 信 (アビコ シン)	法政大学名誉教授			
石神 隆 (イシガミ タカシ)	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員			
石渡 雄士 (イシワタ ユウシ)	秋田公立美術大学美術学部美術学科景観デザイン専攻准教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員			